

ラジオドッグ

作・オカモト國ヒコ

登場人物

大和屋小夜吉 (やまとやさよきち)	中学二年生	警視庁女刑事
野火愛彦 (のびなるひこ)	中学二年生	小説家
大豪田慎太郎 (だいごうだしんたろう)	中学二年生	情報犯罪者
八丁堀ララ子 (十年前／現代) & 手下1		
明智先生		
二宮稲美 & ボンチヨ		
落田のぼる & テキーラ		
金五郎 & 手下2		
猿飛ななみ		
マカロニ		
他たくさん		

シーン1

ザザー・・・キューイン

舞台中央の柱にコンピュータ画面のような文字

アオイソラ

ソラノカナタ

ボクノコエガキコエル？

ボクノコエガキコエル？

僕の声が聞こえるかい？

カーソルが点滅・・・

照明！人の群！

その中に一人、受信器を耳に当て何かを聞いている女、小夜吉。

キューインと、ラジオのチューニングを合わせるような音が時々混じる。

通行人（他の役者全員）が、盗聴された言葉を担当。

通行人 「ちよっと聞いてくれる？ケロリンがさあ

通行人 「はい、カナリア洋品店です。

通行人 「私達ってもう終わりなのかな。

通行人 「そうだ、ムラカミさん覚えてる？

通行人 「わっはっはっは、お前それは。

通行人 「ダメだよ。そっち谷だから。

通行人 「インドで彼女がいなくなっただんです。

通行人 「海の見える家に住みたいんだ。

群唱 「盗聴器からの電波は、半径約300メートルにまで達する。

通行人 「それでね、私言っちゃったのよ。

通行人 「その頃、浄水器売っちゃってね

通行人 「家の窓からは緑の松林が見えてさ。

群唱 「ある都市の繁華街で現在稼働中の盗聴器は、確認されただけで約二千台。推定ではその倍、つまり四千台を軽く越える。

通行人 「男の子ならいいのにね。

通行人 「母さん、八宝菜ってどうやって・・・

通行人 「まっさかあ。ないない、それは。

通行人 「白いカーテンが海からの風で揺れて。

群唱 「現在空は様々な所に仕掛けられた盗聴器の電波で埋め尽くされている。天空には言葉が溢れているのだ。

通行人 「こんな世界は間違ってると思うんです。ですから一緒に弥勒様の

通行人 「こちら1階となっております。

通行人 「ちがうちがう、パロスペシャルってのはこうやってこう！
通行人 「ぎゃー。」

通行人 「そうだ、犬を飼おう。白い犬がいい。」

群唱 「つまり、貴方の愛の電話も、誰かに対する苛立ちの一言も、深夜、流した
哀しい涙の一粒の流れ落ちる音さえ誰かに聞かれていたかもしれないのだ。
そして。

ノイズだんだん大きくなる。

通行人 「もしかして。」

通行人 「いやだからさ。」

通行人 「やめてくれよ。」

通行人 「そうじゃないんだ。」

通行人 「つまり僕が思うに。」

通行人 「私の言う事も聞いてよ！」

通行人 「白い犬と、そしてその傍らには君がいて・・

ふいにノイズがとぎれ、クリアな音声。

慎太郎 「一緒に来い！」

愛彦 「やめろ！自分のやってる事がわかってるのか？」

小夜吉 「！・・・見つけたわ！」

通行人の中から、二宮稲美、落田がくるっと回って通常の役になる。

小夜吉、去る。続いて、二人も目配せをして去る。

その間に愛彦と慎太郎以外去る。

愛彦の部屋。

慎太郎 「一緒に来い！」

愛彦 「やめろ！自分のやってる事がわかってるのか？」

慎太郎 「お前が必要だ。一緒に来い。」

愛彦 「あの時、決めたはずだ。僕らは二度と会っちゃいけないんだ。」

慎太郎 「そうも言ったらねえ事情が出来た。」

愛彦 「事情？」

慎太郎 「お前にも関係がある。」

愛彦 「犯罪者の事情なんて知らない。帰ってくれ。新作の途中なんだ。」

慎太郎 「言うじゃねえか、のび太のくせに。」

慎太郎手を挙げると、手下1&2登場。

愛彦 「！」

手下1 & 2 「わんわんわんわんわん！」

慎太郎 「もう一度あいつを出現させる。

愛彦 「・・・なんだって？」

慎太郎 「もう一度あいつを出現させるんだ。

愛彦 「あいつを・・・ダメだ。そんなこと出来るわけがない。僕たち2人だけ

じゃ

慎太郎 「この部屋は盗聴されてる。

愛彦 「え？」

慎太郎 「天井とコンセントの中に盗聴器がある。電波を追ってここまで来るぞ。

愛彦 「来る？誰が来るんだ。

慎太郎 「あの女だ。

愛彦 「女？・・・まさか

小夜吉、二宮、落田出てくる。

二宮 & 落田 「わんわんわんわんわん！」

小夜吉 「追いつめたわ、大豪田慎太郎！」

慎太郎 「久しぶりだな。

愛彦 「さ、小夜吉？」

小夜吉 「野火君？・・・（大豪田に）何をする気なの！？

慎太郎 「ようやく3人揃った。

二宮 「そしてあなたはすぐ檻の中よ！」

小夜吉 「本部に連絡！ここを包囲！」

落田 「はっ！本部！」

手下1 「ぼちつとな。

落田、通信するが、妨害電波。

落田 「あっぐわ！」

二宮 「ダメです、電波妨害！」

慎太郎 「電波で俺に勝てると思ってるのか？俺に勝てるのはこの世でただ一人

マカベシンジだけだ。

小夜吉 「何をする気！？

慎太郎 「マカベシンジを復活させる。

小夜吉 「あいつは。あいつは二度と現れてはいけないのよ！」

手下2 「親分、株価の暴落が始まりやした！」

手下1 「急がねえと手がつけれなくなりやす！」

野火 & 小夜吉 「なっ

慎太郎 「聞いた通りだ。10年前と同じ事が起こってる。

愛彦 「そんな、ばかな。

慎太郎 「俺もそう思ったが、どうやら事実だ。

小夜吉 「ありえないわ。

慎太郎 「ウダウダやってる時間はねえ。止められるのは俺達だけだ。

慎太郎、小夜吉に迫る！

小夜吉 「やめて！（かわす）

二宮 「先輩、発砲許可を！

慎太郎、間髪入れず愛彦の手を取る。

愛彦 「！

小夜吉、撃つ。慎太郎、よける。

小夜吉 「だったら、だったら私達は何のために別々になったの！？」

愛彦 「小夜吉・・・

小夜吉 「この男性（愛彦）を確保！絶対に奪われないで！

落田 「しかし！大豪田は！？

二宮 「ここまで追いつめたんですよ！

小夜吉 「最悪の事態を防ぐ！急げ！

2人 「はっ！

小夜吉 「10年前と同じ事が起こってる？どういう事なの！？」

慎太郎 「また会おう。今度は邪魔のない所で。

大豪田一味、去る。

落田 「どういう事です、先輩！

二宮 「誰なんです、マカベシンジって。

小夜吉 「マカベシンジ。10年前に世間を騒がせた天才少年よ。

2人 「えっ？

小夜吉 「通信回復したわ。さっきの情報を本部に確認。

落田 「はっ

愛彦 「元気でやってたみたいだな。

小夜吉 「あなたの身柄を保護するわ。

愛彦 「約束してた小説を書くよ。

小夜吉 「えっ

落田 「大豪田の情報は事実です。株価が突然暴落。

二宮 「原因は不明、世界恐慌レベルだそうです。
野火 「10年前と同じ事が起こってるなら、僕らの事件が何かのヒントになるかも知れない。」

小夜吉 「野火君。」

愛彦 「ん？」

小夜吉 「久しぶり。」

愛彦 「ああ。」

小夜吉 「落田、二宮！マカベシンジの名をネット検索！急がないと世界恐慌どころじゃ済まなくなるわよ！」

2人 「はっ！」

愛彦 「その時、僕たちは14才だった。」

小夜吉去り、愛彦は中学時代の気弱な自分になる。

落田と二宮、中学生のチャリノに乗りたいじめっ子になる。

愛彦 「ハア、ハア・・・！（走って逃げている）

落田 「待てよ、のび太！」

二宮 「学校来なさいよ、のび太！」

愛彦 「ぼ、僕はのび太じゃない！野火愛彦だ！」

二宮 「僕はのび太じゃない。」

二人 「わはははははは。」

落田 「捕まえたらどうする？」

二宮 「パンツ脱がせてやる。」

愛彦 「あっ、（つまづく）

二人 「わははははははは。」

愛彦 「うわー！！はっ！」

小夜吉、慎太郎出てくる。

慎太郎 「何やってんだよ！」

愛彦 「えっ？」

小夜吉 「早く行かないと！」

愛彦 「行く？行くってどこに？」

慎太郎 「バカ！」

小夜吉 「決まってるでしょ！」

二人 「東京タワーよ！（だよ！）」

愛彦、状況を思い出し、3人走り去る。猿飛出てくる。

猿飛 「港区全域に緊急配備！逃亡中の中学生3人を発見した。通常の無線はこれ

より使用を禁止する。目標の3人は電波を傍受するぞ。

猿飛去り、マカロニ出てくる。

マカロニ「都内に潜伏中の中学生3人が動き出した！盗聴班は全ての周波数を拾え。3人は必ずサンプルと交信する。サンプルの名は、マカベシンジだ！

マカロニ退場。小夜吉、慎太郎、アンテナで盗聴しながら登場。

愛彦はノートパソコンを持って登場。

小夜吉 「東からは警官隊！

慎太郎 「西からはヤツラだ！

愛彦 「カチャカチャカチャ、出た。港区の路地裏ロードマップ！

3人、手を取り合う。音響で効果。

愛彦 「ここからは別行動だ。

小夜吉 「そうね。3人一緒より

慎太郎 「二人でも着ければ。

愛彦 「それじゃあ、東京タワーで。

二人 「東京タワーで。

3人 「・・・。

3人、別々の方向に走り出しストップ。

愛彦 「2001年に起こった東京タワー電波ジャック事件は僕たち3人、いや、僕たち4人の手によって引き起こされた。その時、僕たちは14才だった。これは、もう会う事のない、もう一人の僕たちの自叙伝だ。

彼がどこで生まれ、何をしたのか、それを語る前に、まずは僕たちの出会いを語ろう。僕、野火愛彦と、大豪田慎太郎、大和屋小夜吉、そしてマカベシンジとの出会いを。第一章「問題児達の集い」

愛彦の部屋になる。

愛彦 「カチャ、カチャカチャ・僕はその日も学校に行かず一日中パソコンをいじっていた。

慎太郎 「バーン！（ドアを蹴り開けた）お前ん家の牛乳はまずい。

愛彦 「だ、大豪田君？

慎太郎 「よう。

愛彦 「どうやって家に！？鍵は！？」

慎太郎 「こじ開けた。

愛彦 「ええっ!？」

慎太郎 「今日は人生の負け犬ロードを爆走中の君に思いがけないチャンスをやろう
と思ってるね!

愛彦 「彼の名は大豪田慎太郎。先生に無理矢理入れられた将棋部で出会った不良
だ。小学校から顔は知ってたが、家に来るどころか話をするのも初めてだ。

慎太郎 「見ろ!

愛彦 「第10回立花ミステリー大賞、賞金500万?

慎太郎 「その賞を取る!俺とお前で!

愛彦 「ムリだよ、そんな。

慎太郎 「二人で話考えりゃいいんだよ。五〇〇万だぞ、家建つぞ。

愛彦 「建たないよ。

慎太郎 「いいか?今までのお前はドラえもんが来てくれなかったのび太君だ。

だが、今日からは違う。俺がお前のドラえもんだ。

愛彦 「どう見てもジャイアンだよ、君は。

慎太郎 「なんだと。

愛彦 「やるよ。まずどうすればいいの?

慎太郎 「話を考えよう。

愛彦 「話かあ、あつ、なんか僕、下っ腹のあたりがじーんとしてきた。

慎太郎 「おう。話考えるってなんかわくわくすんな。

愛彦 「うん。ミ、ミステリーだろ。殺人事件だ。

慎太郎 「まず死体が見つかる。ミステリーっぽい。

愛彦 「もうなんかギッタギッタのバラバラ死体なんだ。腸なんかこうビョー
ンて出でて、何故か脳味噌がプリンのように白い皿にこう・・

慎太郎 「怖い!怖いよ!愛彦君!

愛彦 「そんで、あれだ。密室だよ。

慎太郎 「密室でバラバラ!?愛彦君、なんか観る目変わっちゃったな・・。

愛彦 「トリックは?

慎太郎 「トリック?

愛彦 「だってミステリーだし、密室だから。

慎太郎 「ピーン!来た!来たよ、愛彦君!

愛彦 「何が!何が来たの!？」

慎太郎 「人間が通れない所でもバラバラなら通れる。密室殺人と見せかけて実
は別の場所でバラバラにされていた。腕とか足とか密室に一個一個入れ
ていけばいいんだよ!

愛彦 「それだよ!大豪田君!

慎太郎 「おう!これだ!書け!

愛彦 「うん!カチャカチャ・・はたから見れば、僕らは本物のバカだった。
そして。

チャイムの音が鳴り、学校（部室）に。

慎太郎 「出来たか。」

愛彦 「うん。カチャ。ガーガガガー。ビロビロビロビロ（プリントアウトされる）

慎太郎、それをすごい速さで読む。

慎太郎 「わっはっはっはは。」

愛彦 「あ、あはは。」

二人 「わははははは！&あははははは！

慎太郎、胸倉をつかむ。怒りの形相。

愛彦 「なっ、なんで？」

慎太郎 「キャラが生きてねえよ。」

愛彦 「そんな事言われても。」

明智先生やってくる。

明智 「おっ今日は将棋部勢揃いだな。」

二人 「明智先生。」

明智 「野火、やっ和学校来たな。」

愛彦 「はあ。」

明智 「実は今日はお前達将棋部に重大な指命を与えなければならん。」

慎太郎 「ひよっとして巨大人型兵器に乗って人類の危機を救うんですか？俺、やります！！！」

明智 「大豪田。」

慎太郎 「はい！！！」

明智 「思春期だな！！」

明智、慎太郎を抱きしめる。

明智 「先生お前みたいなの大好きだ。」

慎太郎 「ありがとうございます。」

明智 「ひよっとして、毎日風呂場で水の抵抗を利用して凄く速さのパンチを撃てるように修業してたりするのか。」

慎太郎 「何故、その秘密の特訓を！？」

明智 「くーっ、大豪田！この思春期め！思春期め！

明智、慎太郎の頭をチャトランを撫でるムツゴロウのように撫でる。

明智 「そうかあ。先生も昔は、成長の早い苗を庭に植え、それを毎日こやや
って飛び越えてはものすごいジャンプ力を身につけようとしていたもんだ。
これは小学4年生のフロクでついていた忍者ハットリ君図鑑に載っていた修
行法なんだが他にも長いハチマキを巻いたまま走り、それを地面につけ
ないようにつけようというものすごいスピードで。ものすごいスピードでな！

二人 「先生もういいです。もういいですから。」

明智 「もういいか。実は今日からこの将棋部に新入部員が入る。」

二人 「えっ

明智 「先生のクラスの転校生なんだが何かクラブに入ってたほうが友達も出
来やすいと思ってるな。大和屋、入れ。」

小夜吉 「はい。」

小夜吉入る。

二人 「じよ、女子だ。」

びーんと張りつめる一瞬の緊張感。

明智 「はっ、はっはっはっは。なんだ。自己紹介でもするか。」

小夜吉 「大和屋小夜吉です。」

愛彦 「ののの、野火愛彦です。」

慎太郎 「だだだだ、大豪田慎太郎です。」

明智 「あああああ、明智先生です。」

小夜吉 「知ってます。」

明智 「わっはっはっは！よし、今日の記念に先生がジュースを驕ってやろう。
はい。」

慎太郎 「どっから出さんです、先生。」

明智 「じゃカンパニー。」

4人 「ゴクゴクゴクゴクゴク、プハーツ！」

明智 「いやー、はっはっは。じゃ後は若い皆さんで。」

明智、言いつつ去る。

慎太郎 「せ、先生！

愛彦 「行ってしまった。」

慎太郎 「よりよって女子とは。俺はクラスでは女に興味のないイカしたクールガ
イ通称アイスマンとして皆の尊敬を集めているが、実際には未だに女子と
目が合わせられないシャイボーイなんだ。」

愛彦 「ぼ、僕なんか今年に入って女子と話したの、日直の時だけだよ。

小夜吉、キョロキョロしているが、いつの間にかパソコンを覗いている。

小夜吉 「ふーん。

3人ストップモーション。

八丁堀&明智、対面になるように出てくる。廊下。

八丁堀 「聞きましたわよ、明智先生。

明智 「八丁堀先生。

八丁堀 「おたくのクラスの転校生。

明智 「大和屋がどうかしましたか。

八丁堀 「将棋部に。

明智 「ええ、ちょうど私が顧問なんで。

八丁堀 「あの不登校の野火愛彦、なんだかんだと問題を起こす大豪田慎太郎。

聞く所によると今度の転校生も相当な問題児だそうじゃないですか。それをそんな一カ所に固めて、朱に交わればどころか、これもう、マグマのように真っ赤っかですわよ。

明智 「はあ、しかしまあ、類は友を呼ぶなんてこともあるんじゃないかと。

八丁堀 「2年前のあの生徒のような事がなければいいんですけどね。では。

明智 「・・・。

二人去る。

小夜吉 「これ、誰が書いたの？

愛彦 「えっ、うわ！読んだ？読んだの！？」

小夜吉 「ええ。

愛彦 「読んだんだ、読んだんだ。どうする？殺す？殺すか？

慎太郎 「落ちつけ愛彦。今はまずい。証拠が残る。

小夜吉 「誰が書いたの？

慎太郎 「こいつです。

愛彦 「大豪田君！？」

小夜吉 「そう。貴方が書いたの。

愛彦 「ふ、二人で考えたんだけど、ま、まだ完成じゃないんで。

小夜吉 「カシャ。

愛彦 「な、何をしたの、今。

小夜吉 「デジカメで写真を撮ったの。

愛彦 「え？

小夜吉 「僕の書いた小説です。読んで下さい。カチャ。

愛彦 「何したんだ、今！」

小夜吉 「この恥ずかしい小説をこの中学の端末全部に送ったの。貴方の写真付きで。

愛彦 「うわー！」

慎太郎 「この中学全員に！？お前もう死ぬしかないぞ。恥ずかしすぎる。

愛彦 「大豪田君！！どうすればいいんだ。

慎太郎 「もう中学時代は諦める。そして高校は知ってる人のいない飛田高山などに
行け。

愛彦 「解決になってないよ！あああ。エッチな写真をインターネットでバラ巻か
れた女性の気持ちがよく分かるよ。

小夜吉 「二つだけ方法があるわ。

愛彦 「え？」

小夜吉 「このコンピューター全部にウイルスを感染させるのよ。

愛彦 「そんな事したら、僕は犯罪者だ。

小夜吉 「言ってる場合かしら。はい、このディスクの中にはシステム全部を真っ白
にするウイルスが入ってるわ。今送ったあなたの恥ずかしい小説も消える
の。

慎太郎 「何故そんなの持ってたんだ。

愛彦 「……………」

小夜吉 「さあ！早くしないと、誰かがあなたの恥ずかしい小説を読んでもうわ。
さあ！

愛彦 「……………」

ディスクをもらう。

愛彦 「…………、ガチャ。えい！」

慎太郎 「おお！目には見えないが、ウイルスがどんどん浸食していく！」

愛彦 「これで、僕の恥ずかしい小説も消える！」

慎太郎 「ああ！」

二人 「ボガン！(コンピューターが火を噴く) (客に)わかりやすい表現です。

愛彦 「ふう。

小夜吉 「(冷徹に) 犯罪者ね、あなた。

愛彦 「えっ？」

小夜吉 「どきなさいよ。

小夜吉、慎太郎を突き飛ばす。

小夜吉 「この中学のシステムはもう、使いモノにならないわ。今までのデータも全
部消えてしまった。

愛彦 「それは、君が……」

小夜吉 「あなたのせいよ。」

愛彦 「ぐっ

小夜吉 「あなたがやったの。バラされたくなかったら私の言う事をなんでも聞くし
かないわね。

愛彦 「き、君は一体・・僕になんの恨みが・・

小夜吉 「恨みなんてないわ。ただ一目見た時から、いじめたいの。

愛彦 「・・・・・！（ショックを受けている）

慎太郎 「待て。

愛彦 「だ、大豪田君。

慎太郎 「こいつは俺の、犬だ。

愛彦 「い、犬？犬って、大豪田君？

二人 「バチバチバチバチ！（火花）

愛彦 「ひよっとして人気者なのか、僕は。

小夜吉 「フッ！（吹き矢）

愛彦 「ブスっ！

と、首筋を押さえ倒れる、愛彦。

慎太郎 「あっ愛彦！

小夜吉 「金五郎！金五郎！

金五郎出てくる。

金五郎 「はい、お嬢様。

小夜吉 「あれをさらって頂戴。

金五郎 「は。

金五郎、愛彦をさらう。

慎太郎 「な、愛彦？愛彦ー！！

小夜吉 「オホホホ。残念だったわね。それじゃ。

慎太郎 「くそ、許さんぞ、大和屋小夜吉！

小夜吉 「えい。ポワーン。

慎太郎 「くっ、待て！

慎太郎、去る。

小夜吉の屋敷。愛彦、転がり出てくる。

愛彦 「はっ、ここは。

小夜吉 「ここは私の家。

愛彦 「ぐるぐる巻きにされてる！くそ、僕をどうするつもりなんだ！

小夜吉 「これが何か分かるかしら。
愛彦 「それは。」

小夜吉 「貴方の書いた恥ずかしい小説のプリントアウトよ。」「その血塗られた惨劇
は・・・」

愛彦 「やめろ！やめて下さい！朗読は！

小夜吉 「表現がオーバーすぎね。登場人物のリアクションもオーバーすぎて、読者
がついていけないわ。」

愛彦 「な、なるほど・・・そうだったのか。」

カット割。

慎太郎、登場。屋敷の外。

慎太郎 「忍び込んだ方がいいが、広い屋敷だぜ。むっ？あの明かりは。愛彦！今この

大豪田慎太郎が駆けつけるぜ！とーう！ガチャーン！

カット割り。屋敷内部に。

慎太郎 「ガチャーン！

小夜吉 「あ、あなたは！

慎太郎 「愛彦、助けに来たぞ！

愛彦 「だ、大豪田君！

小夜吉 「庭のドーベルマン達をどうやって。」

慎太郎 「俺のマツハパンチで眠ってもらった。」

小夜吉 「であえ、であえ！

犬達、出てくる。（役者全員）

犬 「ワンワンワンワン！

小夜吉 「よしよし、いい子ね。」

慎太郎 「何故だ、ドーベルマン達は既に倒したはず！

小夜吉 「この子達はドーベルマンじゃないわ。室内犬のスピッツよ！

犬 「キャンキャン！

愛彦 「かわいいなー。」

小夜吉 「ゆきなさい。」

向かっていき、次々と慎太郎にケチらされるスピッツたち。

犬 「キャンキャンキャンキャン！

犬、去る。

慎太郎 「弱い！スピッツは弱い！

小夜吉 「くっ！

慎太郎 「調べさせてもらったぜ、大和屋小夜吉！お前は今年だけで5回以上転

校している！全てお前の悪事が原因でな！

小夜吉 「おほほ。よく調べたわね。

慎太郎 「正にこの世の絶対悪！世間が許しても、俺の正義が許さねえ！

小夜吉 「残念ね、小説を書くの手伝ってあげようと思ってたのに。

二人 「えっ。

小夜吉 「実はもう用意してあるのよ。はい、これをつけて。

二人 「こ、これは・・・？

見るとよくSMなどで見られる仮面が手渡されている。

小夜吉 「えい。

小夜吉が蹴り転がしたのは猿ぐつわと目隠しをされたOL（二宮と二役）

OL 「ヴー！ヴー！

2人 「どわあっ！

慎太郎 「小夜吉さん。この女性は一体・・・？

小夜吉 「あの小説には女性の心理が書いてないと思うの。だから、サンプルとしてさらって来たの。

二人 「えっ！？

小夜吉、さるぐつわと目隠しを取る。

OL 「（愛彦と慎太郎に）助けて！

二人 「わあ。

二人、あわてて仮面をつける。

小夜吉 「さあ、女性の心理を話しなさい。話しなさいよ。

小夜吉、グリグリと鞭の柄の部分でOLの頬を押す。

OL 「ひいひい！

慎太郎 「ど、どうしよう愛彦君。

愛彦 「どうするって・・・。

金五郎、すつと登場する。手には蠟燭の明かり。

金五郎 「お嬢様は寂しいお方なのです。

二人 「わあ！

金五郎 「早くしてご両親を亡くした為にあのような人を人とも思わぬ心をお持ちになられ。

小夜吉 「えい！えい！

愛彦 「大人が注意したらいいじゃないですか。

金五郎 「そんな事したらどんな仕打ちが待っているか。お願いです。人の心の暖かさを、優しさを教えてあげて欲しいのです。

小夜吉 「お言い！お言いったら！

OL 「ぎゃー！

小夜吉 「金五郎、手伝いなさい。

金五郎 「はい、お嬢様。

慎太郎 「爺さん、あんた！

金五郎 「仕方がないのですじゃ。ホレホレー。（蠟燭を垂らす）

OL 「熱い！熱いわ！

愛彦 「や、やめるんだ、大和屋さん！

小夜吉 「あなたの為にやってあげてるんじゃないの。

愛彦 「それは犯罪だよ。目を覚ますんだ大和屋さん！

小夜吉 「うるさい、フツ！

愛彦 「うっ

慎太郎 「何をする！

小夜吉 「フツ！

慎太郎 「うっ

OL 「もうやめて！

小夜吉 「フツ！

OL 「うっ

金五郎 「お嬢様、肩にゴミが。

小夜吉 「フツ！

金五郎 「うっ。

小夜吉 「しまった！至近距離から顔面に！金五郎！金五郎！

金五郎 「お嬢様、お友達をお作り下さい。金五郎は、もう・ガクリ。

小夜吉 「金五郎ー！くっ、もう後戻りは出来ないわ。ポチつとな。ブイーン。

一瞬の暗転。ヘリの音。既にヘリの中。

と同時に金五郎、OL、慎太郎は去っている。

愛彦 「はっ、ここは！？

小夜吉 「気がついたようね。このヘリでマレーシアに向かうわ。あなたには私の奴

隸として働いてもらいます。覚悟はいい？

愛彦 「いいわけないだろ！降ろせ！」

小夜吉 「お黙り。ポチッとな。」

両袖より木がたくさん登場。

木 「私達は庭の木！屋敷の庭がサンダーバードの秘密基地のように！ガガガガガ
ー！」

小夜吉 「ヒュンヒュンヒュンヒュン。」

風圧でしなる木。

愛彦 「くそ！今邪魔するととても危険な気がして邪魔出来ない！ん？あれは！

慎太郎、登場。（屋敷の屋根に）

小夜吉 「屋敷の屋根に！コラ！降りなさい！危ないわよっ！」

慎太郎 「この世に悪の栄えた試しなし！」

小夜吉 「どうする気？」

愛彦 「このへりに飛び移る気だ！」

小夜吉 「絶対ムリよ。」

愛彦 「だが彼はやる。何故なら彼は少年ジャンプしか読まないバカだから！」

慎太郎 「いくぜ！とーうわー！うわー！飛距離が足りなーい！」

愛彦 「当たり前だー！」

慎太郎 「だが！伸びろ、俺の腕！ゴムゴムの・・・鞭！」

愛彦 「まるで腕がゴムのようにー！！？」

小夜吉 「エビス堂大交響楽団（劇団名）はリアリティーを重視する劇団です。」

慎太郎 「うわー！（落ちる）」

愛彦 「妄想か！」

木たち 「しかしその時、庭の木々が！」

木 「ぼよーん！」

木 「ぼよーん！」

木 「ぼよーん！」

慎太郎 「ありがとう！大自然の力！そして！うわー！ドアを開ける、愛彦！」

愛彦 「ガチャ！」

慎太郎、へりにイン。同時に木も去る。

慎太郎 「さすがの俺も死ぬかと思っただぜ。」

愛彦 「何がリアリティーなんだ・・・」

小夜吉 「あなた！私のへりよ！出ていきなさいよ！
慎太郎&愛彦 「そ、操縦は？
小夜吉 「えっ？

3人、うわー*3

小夜吉 「と、開いていたドアから唯一へりを操縦出来る私が！きゃー！
愛彦 「捕まれ！

愛彦、小夜吉の手を掴む。

慎太郎 「愛彦、離すな！（と操縦席へ）

愛彦 「お、重い！ぐわっ！

小夜吉 「離しなさい！離しなさいよ！

慎太郎 「えーつと。たぶん、こうだ！

三人 「わー！

慎太郎 「違ってたようだぜ！

小夜吉 「私は貴方を奴隷にするつもりだったのよ。

愛彦 「・・・。

慎太郎 「だいたい、わかった！こうだ！

三人 「どわー！

小夜吉 「今なら私を落として、シートベルトしたら助かるわ。だからこの手を離すの。

愛彦 「いやだ。

小夜吉 「どうして。このままだと死ぬのよ！？

愛彦 「いやだ！

慎太郎 「こっちか！？

三人 「ぎよわー！

愛彦 「ととととと！友達になろう、大和屋さん！

小夜吉 「えっ？

愛彦 「ぼぼぼ、僕もあんまり友達がいなし、そ、それに小説書くのも手伝って欲しいし、それに！

小夜吉 「それに？

慎太郎 「もうダメだ！わからん！（ふて寝する）

愛彦 「大和屋さんは、とっても、かかかか、かわいいと思うよ！

小夜吉 「・・・。

小夜吉、愛彦の手をとり、へりの中へ入る。

小夜吉 「代わって。

操縦を代わる。ヘリの音大きく。

二人 「わー！」

無事に着陸。

二人 「・・・助かった。

小夜吉 「じゃあ、話を考えましょうよ。

慎太郎 「あん？

愛彦 「そうだね。あ、こ、これから三人で小説を書く事になったんだ。

慎太郎 「なんだと。

愛彦 「まず、どうしようか。

慎太郎 「待て！」

愛彦 「・・・大豪田君

慎太郎 「お前、国語の成績は。

小夜吉 「5。あんたは？

慎太郎 「3！ しまった！

愛彦 「たのもしいな。

慎太郎 「待て！条件がある。賞金は五〇〇万。まず企画発起人の俺が二〇〇万、部下のお前達は一五〇万づつが妥当だと思う。

愛彦 「大和屋さん、二人でやろう。

小夜吉 「うん。

慎太郎 「待て。わかった、三頭分だ。

愛彦 「じゃあ、どうしよう？

小夜吉 「まず、死体をもっとグチャグチャにしましょう。ミンチのような状態なの。

二人 「ミンチ！？」

慎太郎 「そ、それで。

小夜吉 「死体が一個じゃおもしろくないわ、十五人分のミンチ。

2人 「一五人分のミンチ。

慎太郎 「黒い。黒い想像力爆発ですね、小夜吉さん。

小夜吉 「それから。

愛彦 「まだあるの。

小夜吉 「主人公を変えましょう。実は前から考えていたキャラクターがあるの。

慎太郎 「どんな。

小夜吉 「わずか14才の天才少年。警察でも解決できない難事件をたった14才の少年が次々と解決していくの。

慎太郎 「おもしろそうだ。

愛彦 「主人公の名前は？

小夜吉 「名前は、そう……。マカベシンジ！」

フルボリユームで音響！「アナーキーインザUK」
(上演当時の劇団用演出部分。省略可)

ナレーション 「果たして、天地を揺るがす謎の天才少年、マカベシンジの正体とは！？そして、その復活とは如何に！？

ようこそいらっしやいました、エビス堂大交響楽団第10回公演
「ラジオドッグ 超絶版」ご来場誠にありがとうございます。

全員出てくる。役者紹介

以上、11人の役者が渾身の力でお届けするエビス堂大交響楽団第10回公演「ラジオドッグ 超絶版」最後までごゆっくりお楽しみ下さいませ。」

小夜吉、二宮を残し、全員去る。(以下、本編)

現代、警視庁。 小夜吉、二宮。

小夜吉 「二宮、どうなってる！」

二宮 「野火さんの小説、先ほど第一章を確認しました。

小夜吉 「で？」

二宮 「知りませんでした。あの指名手配の大豪田と小説家の野火愛彦、それに加えて警視庁電波捜査班きつての敏腕刑事、剃刀小夜吉が知り合いだったなんて。

小夜吉 「おーっほっほっほ！褒めても何も出ないわよっ！クーン。

二宮 「鼻があんなに高く。本当に屈託なく育ったんですね。

落田出てくる。

落田 「先輩！鼻伸ばしてる場合じゃありません。

小夜吉 「はっ！何か分かった？」

落田 「言われた通りマカベシンジをネットで調べた所、こんなホームページが。

二宮 「少年マカベシンジの事件簿……？」

落田 「最近マニアの間で人気のページだそうです。このマカベシンジと名乗る人間が、未解決事件を次々と解決してるんです。

二宮 「解決ってどういうこと。この連続毒グモ殺人事件なんて、本庁がかかりつきりなのに、まだ犯人の目星もついてないのよ。

落田 「それが解決しちゃってます。とにかく読んで下さい。

小夜吉 「……こんな事、あるわけないわ。

落田 「先輩が言う十年前に現れたマカベシンジってのも、こうやって未解決事件を解決したんですよね。」

二宮 「すごい、犯人は最初の被害者の主婦だわ！」

小夜吉 「類希な直観と水も漏らさぬ推理力。そしてそれを展開する天才的な論理と情報収集能力・・・。」

二宮 「読んだだけで、犯人が一目瞭然。こんな事って・・・。」

小夜吉 「こんな事が出来るのはマカベシンジしかいないわ。」

落田 「やはり同一人物なんですわね。先輩の言う10年前に現れた少年と。一体、何者なんです、マカベシンジって。」

小夜吉 「私が考えた小説のキャラクター。」

落田 「え？」

小夜吉 「最初はね。」

二宮 「野火さんの小説にも出てきました。でも、先輩達を書いた小説の、ただの登場人物なんですよ？」

小夜吉 「私にもどうなってるのか分からないけど、これだけは確かよ。マカベシンジは実在した。そして、二度と現れるわけがないの。」

二宮 「じゃあこのホームページは一体。」

落田 「それに今も続いている株価の暴落。マカベシンジを名乗るたった一人の相場師に世界中の経済がムチャクチャにされていつてるんですよ。」

小夜吉 「野火愛彦と連絡を取って。」

二宮 「はい。(携帯をかける)」

小夜吉 「あなたはこのホームページの作者を探す。急いで。」

落田 「はい！」

窓の外より、ハデな事故音いくつも。

3人 「!!!」

小夜吉 「なに？」

二宮 「追突事故です。信号が一斉に青に。」

落田 「どうなってるんだ。」

小夜吉 「交通管制室に連絡！ハッキングの形跡を調べさせて！」

落田 「はっ！」

二宮 「野火愛彦、連絡取れました。」

小夜吉 「後でいい。」

落田 「やはりハッキング。信じられない速度でプロテクトが破られたそうです。」

小夜吉 「・・・マカベシンジ。」

二宮 「野火さんから伝言です。小説は、第二章に入ったそうです。第二章のタイトルは「現れた4人目の僕等」

小夜吉 「・・・。」

不穏なムードの音響が響き暗転・・・

シーン2

慎太郎、愛彦出て来る。二宮は去っている。
中学時代。

愛彦 「そうして僕たちは出会い、一緒に小説を書く事となった。小夜吉は初めての
うちは、は虫類のような無表情な目をしていたが

小夜吉 「(無表情に) ハリーポッターでいうと私、ハーマイオニーね。くししゆ。

愛彦 「やがて、うちとけて来たのか世間一般の女子並みの表情が宿って来た。

小夜吉 「あははは、こっちよ、野火君!

愛彦 「うん。あはは、うわー!(落とし穴に落ち槍に刺さる) グサツ!

慎太郎 「ん? 愛彦? 愛彦ー!

愛彦 「や・・・大和屋さん・・・

小夜吉 「痛い? ねえ、痛いの、野火君?

愛彦 「これが世間一般かどうかは、僕にはよくわからない。そして。

何日か後。

慎太郎 「その時、この小説の主人公天才少年マカベシンジは犯人を指摘する。「神
田川先生、犯人はあなたです!」

愛彦 「何を言ひ出すんだね、マカベ君。タラリ。

小夜吉 「額を流れる動揺の汗。主人公マカベ少年はさらに続ける。

慎太郎 「この連続人肉ミンチ事件、最大の疑問はどうやって15人分もの人肉をミ
ンチにしたかでした。しかし貴方なら可能なんです、神田川先生。

愛彦 「なぜ、なぜ私なら出来るというんだ。

慎太郎 「なぜなら、貴方が料理人だからです!

愛彦 「ドキ!

二人 「・・・」

小夜吉 「野火君。今時ドキって。

愛彦 「・・・(でかい) ドキイッ!

慎太郎 「そういう事じゃなくて。

小夜吉 「リアリティーがないわ。

愛彦 「だってわかんないよ。大体、このストーリーがおかしいんだ。なんで料理
人だからってミンチに出来るんだ。そんなオチでいいなら、最初に「料理
人の神田川です」って自己紹介した段階でバレてるよ!

慎太郎 「でも主人公が中学生なのはなかなかいいよ。

小夜吉 「でしょ? わずか14才の天才少年が難事件を解決! カッコいいわ。

愛彦 「現実から目を逸らさないでくれ。僕達が考えたストーリーは最悪だ。

慎太郎 「あ、そういえば明智先生がまたジュースくれたんだ。小夜吉、飲む？」

小夜吉 「わあ、ありがとう。大豪田君。」

二人 「ゴクゴクゴク、プハー。」

小夜吉 「ゴフ、鼻から出ちゃった。」

慎太郎 「あはは。きったねえ。」

小夜吉 「あはは。待てえ。」

二人、走り去ろうとする。

愛彦 「死んだ目でくだらないコントを始めるんじゃない！」

二人 「だって。」

愛彦 「何か手があるはずだ。中学生の僕等にだってナイスなストーリーを考えたける方法があるはずなんだ！」

二人 「そして。」

何日か後。

小夜吉 「思うに私達3人は人間というものをよく分かっているような気がします。」

愛彦 「それは言える。話を考えていても、その時の人物の心理はまるでわからない。」

慎太郎 「うむ。」

小夜吉 「そこで私は考えたわ。これよ。」

小夜吉、何かを出す。

愛彦 「なにこれ？」

小夜吉 「盗聴電波の受信器よ。」

二人 「えっ？」

小夜吉 「今はどこにでも盗聴器があるわ。これでいろんな事を盗聴して人間を学習するのよ。」

愛彦 「待って下さい。それは犯罪ではないんですか。」

慎太郎 「大丈夫だ。盗聴した内容を人に言ったり公表したりすると犯罪になるが、個人で楽しむ場合は犯罪じゃない。」

愛彦 「でも、3人で話し合ったりすると人に言うのと同じ事になっちゃうんじゃない。」

慎太郎 「うるさい。また誰かさらって来られるよりはこっちの方がまだいい。」

愛彦 「それもそうだ。」

小夜吉 「それでは、人間を学びましょう！」

3人 「ヤー！」

愛彦 「そうして僕等は、盗聴を始めた。」

慎太郎のみ残して二人去る。

役者みんな盗聴ミニコント。テーマは「中学生の知らない日常」

(上演時、大体こんなのでとといういい加減な脚本が挿入されていた。

ここでもそれを挟んだままにしておく。あくまでも必要なのは三人が盗

聴を始めたという点描である。

書かれた役名はすべて役者の名前。以下、当時書いたまま)

植村、高瀬、猪平、しのぶ。

植村&高瀬ゆづっぽい歌を歌って登場。

植村

「ダメだ！これじゃ年食ったゆずだ！

高瀬

「俺達にやもう時間がねえんだよ！

しのぶ&猪平、ハナハナっぽい歌を歌って登場。

しのぶ

「ダメよ、こんなんじや。ハナハナのパクリじゃないの！

猪平

「ビジュアル的にはキロロかもね。

2人

「くっ

4人

「そして、4人は出会った。

喫茶店に。

植村

「楽曲的には負けてない。後はオリジナリティーだ。そこで相談なんだが、メンバーを交換しないか。

しのぶ

「賛成だわ。

猪平

「なるほど。

高瀬

「スワッピングか。

植村

「それは違う。

しのぶ

「決まりね。

植村

「ああ。どっちが先にデビューするか、競争だぜ！

植村&猪平。高瀬&猪平。

みんな

「1、2。1、2、3、4！

バーゲンズっぽい歌を歌う。

みんな

「(ガクリと膝を落として)バーゲンズだ・・

みんな、去る。(慎太郎も)

役者でミニコント(中学生の知らない日常)。百合子、マナブ、星見。

小夜吉、出てきて盗聴している。

星見&百合子 「あははは。

星見 「こーいつう！

百合子 「うふふ。愛してるタケシさん。はっ！

マナブ 「ア、アケミそいつは・・

星見 「だ、誰だいこの人

百合子 「夫よ。

星見 「えっ

百合子 「かかってこいコラ！（マナブにファイティングポーズを）

星見 「どういことなんだ、アケミさん？

百合子 「来い、コラ！

マナブ 「わー！（包丁を出す）

百合子 「刺せんのか？刺せんのか、コラ！

星見 「ちよつと2人とも落ちついて。

マナブ 「し、死ねやー！

百合子、星見を盾に。ザク！

星見 「ぐあ

マナブ 「や、やっちまった。どうしよう、アケミ。

百合子 「う、埋めるのよ。

星見&マナブ 「えっ

星見 「アケミさん、僕・・まだ生きて・・

百合子 「早く！

星見 「やめて・・生きてるから・・（そのまま運ばれていく）

小夜吉 「び。

小夜吉去る。

台本上に書かれていたのは以上。

ミニコント終了。

愛彦出てくる。

愛彦盗聴している。

マカロニ、八丁堀出てくる。どこかの喫茶店。

八丁堀 「お待たせしました。

マカロニ 「八丁堀先生。

愛彦 「えっ。

マカロニ 「どうです、調査の方は。

八丁堀 「私も色々調べたんですが、2年前の事件の事は皆、口を閉ざしてしまってます。

マカロニ「生徒の自殺。あの頃は似たような事件が多すぎて警察もつっこんだ捜査はしませんでした。ただ2年経った今もなお、私の記者としての嗅覚は何故か刺激されています。」

八丁堀「言いにくいんですが報酬の方は」

マカロニ「それは安心して下さい。それからこれを。」

八丁堀「なんですか。」

マカロニ「死んだ生徒が残した小説です。何かの参考になるかと。ではまた後日。」

あ、そうそう。携帯電話での連絡は控えて下さい。最近デジタルでも盗聴されるそうですから。

八丁堀「はい。」

マカロニ、八丁堀去る。

愛彦「・・・なんだ？これ。」

慎太郎、小夜吉出てきて、3人になる。

慎太郎「俺は夢追い人の限界と挫折を学んできました！」

小夜吉「私は開き直った女性の強靭さを学んできました！」

愛彦「僕は八丁堀先生のバイトについて学んで来ました。」

慎太郎「なんだよ、それ。」

愛彦「なんだかわからないけど、バイトしてるみたいなんだ。2年前の事件がどうとかで。」

慎太郎「へえ。」

小夜吉「事件？」

慎太郎「たぶんあれだろ、俺らの2コ上のセンパイが自殺したとかっていう」

小夜吉「ふうん。」

愛彦「それにしても、盗聴器ってホントにいろんなトコに仕掛けられてるんだな。吃驚したよ。」

慎太郎「前に新聞で読んだが、一人暮らしの大学生の娘が心配だからってそのマンションに盗聴器を仕掛ける親もいるらしい。」

小夜吉「なるほど、盗聴器があるって事はやっぱり何かの理由があって誰かが仕掛けたのよね。」

愛彦「女子大生かあ」

愛彦&慎太郎「はっ！！」

慎太郎「な、愛彦君・・・！」

愛彦「だ、大豪田君・・・！」

二人手を取り合い、にやける。

小夜吉 「どしたの。」
慎太郎 「いや、なんでも。」

愛彦 「じゃあ明日までにそれぞれストーリーを考えてくる事にしよう。じゃ！
小夜吉 「……。」

二人、去る。小夜吉も去る。
愛彦、慎太郎そっこうで出てくる。夜。

愛彦 「い、いいのかな僕たち中学生なのに。」
慎太郎 「落ちつけ愛彦。顔がニヤケてるぞ。」

愛彦 「大豪田君だって。」
二人 「ワハハハハ！シー……！」

慎太郎 「ここが女子大生のお姉さんがたくさん住んでいるというマンションだ。」
愛彦 「なんかこう競り上がってくるモノを感じるよ。」

慎太郎 「俺もだ。（真剣に）いくぞ。」
愛彦 「うん。」

ノイズの音。
八丁堀出てくる。

八丁堀 「フンフンフン。セクシーポーズ。意味なく自宅で。」
二人 「ゴクリ。」

八丁堀 「よいしょっと。トゥルルルル。あら電話だわ。」
慎太郎 「女子大生の電話だ。」

愛彦 「ぼ、僕の中で、何かが破裂しそうだ。」
八丁堀 「はい、もしもし。八丁堀です。」
二人 「……！！」

二人、無言のまま、とっくみあいのケンカを始める。

愛彦 「八丁堀先生じゃないか！何が女子大生のお姉さんだ！
慎太郎 「愛彦君、目が怖いよ。とにかく聞こう。」

猿飛出てくる。猿飛、銃かなんかを手入れしながらセリフ。

猿飛 「もしもし。私です。」
八丁堀 「はっ、どうも。」

猿飛 「どうかしましたか。」
八丁堀 「いえ、8の字より業務連絡、ケース13進行中。彼らも既にあの文書を手
に入れていた模様です。本日の密会で手渡されました。」

猿飛 「了解。これからの情報レベルは3にまで上げて下さい。

八丁堀 「もう少し上げた方が・・怪しまれないでしょうか。

猿飛 「カバーストーリーは先に延ばした方が効果を得やすいとの判断です。それから。

八丁堀 「はい。

猿飛 「Aへの調査を強化して下さい。もうそれほどの猶予はありません。

八丁堀 「8の字了解しました。では。

猿飛去る。

八丁堀 「カチャ。そうだ、昨日のサンマが残ってたわ。フンフンフン。

と、去る。

愛彦 「なんだこれ。

慎太郎 「わからん。

突然、ヘリの音。

二人 「うわっ！なんだこれは！

小夜吉、金五郎の操縦するヘリにハコ乗りになったポーズで登場。

小夜吉 「バラバラバラバラ！見つけたわよ、ミスターエロス共！

二人 「さ、小夜吉！？」

小夜吉 「（飛び降りた）ヒュルルル、スタッ！あなた達のエロ会話は既に録音済み。カシヤ「僕の中の何かが破裂しそうだ」何が破裂しそうなのかしら、野火君。

愛彦 「やめろ！どうしてここが！？」

小夜吉 「オホホホ！実はあなた達の学生服に盗聴器をつけさせてもらったの。

慎太郎 「なんだと！これか！

二人 「バキ！（踏む）

慎太郎 「恐ろしい女め。

愛彦 「それでも友達か！

小夜吉 「お黙りなさい、この少年エロス！

二人 「エロスって言うな！

小夜吉 「そんな事より、さっきの八丁堀先生、おもしろそうな電話ね。

慎太郎 「それも聞いてたのか。

小夜吉 「クンクン。謎の匂いがするわ。

慎太郎 「え？

小夜吉 「たぶん昼間に言ってた2年前の事件がらみってどこね。なんで2年も前の事件をまだ調べてるのかしら。

愛彦 「僕等には分からない大人の事情があるんだよ、きっと。

小夜吉 「いいえ、そこに謎があるからよ。はっ！これだわ、二人とも。

二人 「え？

小夜吉 「ストーリーがイマイチなら、現実の事件を解決すればいいのよ。

慎太郎 「何言ってるんだよ。

愛彦 「そうか。実は小説よりも奇なり。現実未解決の事件を僕たちが解決してしまえば、どんな小説よりもリアリティーがある。

小夜吉 「そうそう。カシコイわね、野火君。

慎太郎 「だから何言ってるんだよ。

小夜吉 「バカね、私達でこの二年前の事件を解決するのよ。

愛彦 「そしてそれを小説にするんだ。

慎太郎 「どうやって？俺達中学生だぞ。

小夜吉 「何言ってるのかしら。私達には、これ（盗聴器）があるのよ。

ノイズ！

何か話しながらゆっくりと去る3人。

同じ現場。マカロニ出てくる。手には盗聴器。

マカロニ「（携帯みたいなので）ピ。マカロニより報告。新たなラジオドッグ発見。どうします？

ボス（グラサンなどをかけた男）出てくる。

ボス 「どういうヤツだ？

マカロニ 「ガキです。学校になじめなさそうなタイプが三人。

ボス 「年は？

マカロニ 「おそらく中学生でしょう。

ボス 「ならほっておけ。それよりも

マカロニ 「分かっています。最近ラジオドッグ共もあなどれませんから。二つ三つ、処理しておきます。

ボス 「任せた。

ボス、去る。

音響。

マカロニ「。

マカロニ、手を挙げる。

ポンチョとテキーラ（スパイ役）出てくる。

マカロニ」。

シュツと手を下げ、3人去る。
小夜吉&金五郎出てくる。

金五郎 「お帰りなさいませ、お嬢様。

小夜吉 「金五郎、来月の私のお誕生日にパーティーを開催したいんだけど。

金五郎 「とうとうもしや

小夜吉 「私、・・・友達が出来たの。

金五郎 「ほ、本当ですか、お嬢様。

小夜吉 「うん。

金五郎 「お、おめでとうございます！

小夜吉 「あまり興奮しないで金五郎、傷口が開くわ。

金五郎 「初めてお優しいお言葉を。くうっ、早速手配いたします！10年ぶりに大広間を使いましょう。ああ、このお屋敷で再びパーティーを仕切れるとはこの

金五郎夢のようでございます。楽隊はどういった物がよろしいでしょうか。

お料理も最高のものを・・・

小夜吉 「そんなに盛大じゃなくていいの。・・・二人だけだから。

金五郎 「・・・（満面の笑顔で）はい。

二人、去る。

慎太郎、出てくる。

慎太郎 「母ちゃん、メシ！そうだ、最近愛彦のヤツ学校来るようになってさ、俺の

お陰だぜ。それからあれだ、こないだ転校してきた小夜吉つてのとも仲良くなつたぜ。そいつん家、すげえ金持ちでさ、今度連れて来るよ。いや男じゃねえよ、ヘンな名前だけど女。まあ女にしちやなかなか見所のあるヤツだな。

愛彦、たたつと出てきてパソコンを叩く。

表情はなにかしら夢見るような使命感に燃えている。

同時に小夜吉と金五郎も別空間に出て来る。

小夜吉照れつつ友達のを金五郎に話す。金五郎もうれしそうだ。

愛彦 「カチャカチャカチャ・・・

母 「あなた、愛彦の事なんだけど。

父 「また学校行ってないのか？

母 「それが行くようになったのよ。毎日。

父 「良かったじゃないか。」

母 「そうなんだけど、毎日帰りが遅いし、いつもなんか考え事してるみたいにはぼーっとして。私だんだんあの子がわからなくなってきたわ。」

父 「大方、好きな子でも出来たんだろ。」

母 「そんな。」

父 「そういう年頃だよ。心配する事ないさ。」

愛彦 「カチャカチャカチャカチャ・・・大和屋さんかあ・・・カチャカチャ。」

ノイズ！場面転換3人盗聴している。

慎太郎 「ん？・・・ちよつと来い。」

二人 「え？」

慎太郎 「聞け。」

八丁堀出てきて、キョロキョロする。

八丁堀 「シャツ（机の引き出しを開けている）、ガサガサガサ、ガサガサガサ（引き出しの中をあさりながら）ないない、ないわね。」

明智先生出てくる。

明智 「何かお探しですか。」

八丁堀 「ぬわー！なんの事ですか、明智先生。」

明智 「今、私の机を探ってたじゃないですか。」

八丁堀 「あら？この机明智先生の？いやだわ、間違えちゃった。でへ。」

明智 「知ってるんですよ、貴方が雑誌社の人と会ってるの。」

八丁堀 「え？雑誌社？八丁堀、わかんない。」

明智 「大方2年前の事件の事でしょうが、あれは警察に言った事が全てです。」

八丁堀 「2年前、あの生徒の担任は明智先生でしたわね、しかも将棋部に。」

明智 「あの生徒の話は、もうやめて下さい。」

八丁堀 「あ、お酒飲みたい。どうです今晚、きゅつと。色々聞きますわよ。」

明智 「露骨ですね八丁堀先生。お酒の席で私がペラペラしゃべるとでも」

八丁堀 「驕りますよ。」

明智 「！」

盗聴3人が場所移動。

明智と八丁堀がくるっと回って座るマイムをすれば、そこは既に居酒屋。

明智 「（酔ってる）大体ね、教頭ダメ。ね？先生もそう思われるでしょ？」

八丁堀 「そうですね。で、明智先生。2年前の事件、大変だったですねえ。」

明智 「八丁堀先生、泥酔してても分かるくらい露骨ですね。
八丁堀 「これ、なーんだ。」

八丁堀、何か冊子を出す。

明智 「・・・これは。」

八丁堀 「「ラジオドッグ」

愛彦 「えっ？」

八丁堀 「二年前に死んだ生徒が残した小説ですわ。未完のままですけど。」

慎太郎 「昨日受け取った文書っての。」

小夜吉 「これね。」

愛彦 「・・・。」

八丁堀 「なかなかおもしろい着想ですわね、盗聴電波を追う猟犬。天空には言葉が溢れている。文章も構成も中学生のレベルでは考えられませぬわ。」

明智 「どんなに才能を持った人間でも死んじまっちゃ終わりです。」

八丁堀 「先生は。」

八丁堀、ずいと乗り出す。

八丁堀 「彼が殺されたと考えられた事は？」

明智 「な、何を言うんです。誰に殺されたっていうんですか。」

八丁堀 「例えばこの小説に書かれたスパイ組織とか。」

明智 「は。」

二人 「はっはっは&おっほっほ。」

明智 「意外に先生、想像力豊かなんですね。スパイ組織ですか。」

八丁堀 「ええ。私はそう思ってるんですよ。」

居酒屋のシーン、消え、三人のシーンのみに。

愛彦 「ラジオドッグ・・・聞いた事があるぞ。」

小夜吉 「なんなの、ラジオドッグって。」

愛彦 「わからない。でもどこかで聞いたんだ。家に帰って調べてみるよ。」

慎太郎 「俺もこの受信器改造してくるぜ。」

小夜吉 「わかった。じゃ明日学校で。」

二人 「学校で。」

小夜吉を残し二人、去る。

夕方の学校に一瞬で切り替わる。（わかりやすくチャイムなど鳴る）
下校風景。ランニングするラグビー部の人々など。

その中を一人歩く小夜吉、明智先生が職員室から出てきて

明智 「お、ちょっと待て。大和屋。」

小夜吉 「先生。」

明智 「どうだ。学校にはもう慣れたか。」

小夜吉 「はい、まあまあ。」

明智 「そうか。将棋部だろうだ。先生顧問だけど、何かが学校のコンピューターにウィルス巻いてな。その処理でもう昼寝するヒマもないよ。」

小夜吉 「……。」

明智 「どうだ、あの二人は。」

小夜吉 「野火君と大豪田君ですか？仲良くやっていますよ。」

明智 「あの二人はちよっとおかしな所もあるが、根はいいヤツらだから。」

小夜吉 「私もそう思います。」

明智 「……最近どうしたんだあの二人？」

小夜吉 「え？」

明智 「大豪田はともかく、野火まで毎日学校来てるそうじゃないか。なんか心境の変化でもあったかな。大豪田もわけわかんない事言って3階から飛び降りたりとか、お前が来るまでは、色々やってたんだよ、あのバカは。思春期で脳内麻薬、出まくってたんだな、ありや。」

小夜吉 「先生っていい人ですね。」

明智 「あん？」

小夜吉 「なんとなく。」

明智 「そんな事ないぞお。先生の家のパソコンには人には言えんような猟奇的なエロ画像が、何万枚もな。」

小夜吉 「聞いたんですけど、二年前にこの中学で男の子が自殺したって。」

明智 「あ、ああ。知ってたか。将棋部だったんだがな。」

小夜吉 「屋上から飛び降りたんですよね。いじめで自殺って。」

明智 「新聞とかはな。でも、ホントはいじめなんて無かったんだなあ。」

小夜吉 「フンフン。」

明智 「ま、中学生でも死にたくなる事くらいあるだろ。な？」

小夜吉 「その発言は生徒には、まずいんじゃないや。」

明智 「はっはっは。お前は死にそうにないよ。」

小夜吉 「その子は死にそうだったんですか？先生から見ても。」

明智 「お前、新聞記者とか向いてるんじゃないか。」

小夜吉 「あはははは。で？」

明智 「んー。ちよっとお前らに似てたかもな。」

小夜吉 「え？」

明智 「学校に馴染めなさそうな所が。将棋部か？」

小夜吉 「はい。」

明智 「じゃがんばってな。」

明智、去る。

慎太郎、すごい盗聴器（すごいアンテナとかデカイ）を持って出てくる。

慎太郎 「見ろ、小夜吉。」

小夜吉 「うわー！」

慎太郎 「これでどんな電波でも聞けるぜ。しかもNTTその他電話会社の携帯の中身もパクツて入れたから、デジタル携帯でも盗聴可能だぜ！」

小夜吉 「あんたそれで歩いたら、盗聴してんのバレバレよっ！」

八丁堀登場。

八丁堀 「・・・。」

慎太郎 「はっ！謎のバイトをする女！」

小夜吉 「どわーっ！」

八丁堀 「？なんですって？」

小夜吉 「八丁堀先生、家庭科の授業でわからない所があるんですけど。あのチクチク縫うのって、何縫い？ねえ、何縫いなの？」

八丁堀 「それ、なに？大豪田君？」

慎太郎 「こ、これは・・・」

小夜吉 「ぐお、最大のピンチ！」

慎太郎 「これは・・・」

八丁堀 「なあに？」

慎太郎 「宇宙からの電波をキャッチする物です。主にレタイクル座方面からの。」

八丁堀 「フーン、・・・お似合いねっ！」

八丁堀、ツカツカと去る。

小夜吉 「貴方が本物のバカだと思われてて本当に良かった。」

慎太郎 「全くだぜ・・・。そうだ、こんな場合じゃない。部室に来い。愛彦がすごい見つけたんだよ！」

小夜吉 「え？」

愛彦出てきて、そこは部室。

小夜吉 「すごいのは何よ。」

愛彦 「かなり前にラジオドッグってホームページに偶然アクセスした事があったんだ。」

小夜吉 「ラジオドッグって、あの自殺した先輩が書いた小説の？」

愛彦 「そう、同じ名前だから思い出したんだけど。そこで何かのソフトをダウン

ロードしたんだ。

小夜吉 「で？」

愛彦 「そのホームページは何故かもう消えてた。このソフトの事も忘れてたんだけどあれから色々試して

慎太郎 「俺の改造受信器・大豪田スペシャルと組み合わせたわけだ。ちなみにこいつはどんな弱い電波でも拾えるし、全部の周波数に対応している。

小夜吉 「で？」

慎太郎 「大豪田スペシャル、電源イン！」

愛彦 「アーンド、実は暗号解読ソフトのこいつをスタート！」

二人 「すると！」

ノイズ。

二人 「・・・あれ？」

小夜吉 「何よ。」

愛彦 「おかしいな、さつきはちゃんと。」

小夜吉 「どういう事よ。」

慎太郎 「ちゃんと盗聴出来たんだよ。普通じゃ使っていないような周波数でも。」

小夜吉 「ただの偶然でしょ。」

愛彦 「そんな事ない。じゃあこのソフトは何なんだ。」

小夜吉 「知らないわよ。テキストに拾ってきたのが、そんなうまいソフトなわけないでしょうが。」

慎太郎 「さつきはちゃんと。な？」

小夜吉 「いて。」

愛彦 「と、大豪田が振り回すアンテナにぶつかり小夜吉の手がパソコンのキーボードに触れた。」

3人 「その時！」

ノイズ消え、音響。

声を先行させながら、落田、金五郎、二宮、猿飛、マカロニ、ゆつくりと入場。(便宜上役名表記だが、マカロニ以外は声1234といった役で)

マカロニ 「ラジオドッグ発見。」

全員 「ラジオドッグ発見。」

マカロニ 「直ちに排除します。」

全員 「直ちに排除します。」

猿飛 「ビ。敵通信電波の傍受に成功。」

二宮 「盗聴器発見しました。」

マカロニ 「A班B班、配置完了。」

金五郎 「よし、突入せよ。」

全員 「突入せよ。」

愛彦 「何だ、これ。」

慎太郎 「分らん。」

マカロニ 「アジトはもぬけの殻です。」

金五郎 「C班に連絡、包囲網を縮める。」

二宮 「情報が漏れていた可能性があります。」

落田 「新たなラジオドッグ発見。」

金五郎 「直ちに排除せよ。」

マカロニ 「通信電波の周波数を非常時設定に切り替える。」

猿飛 「非常時設定に切り替える。」

二宮 「了解。」

落田 「了解。」

金五郎 「了解。」

全員 「周波数を非常時設定に切り替える。」

ノイズの音、大きくなり、3人以外去る。

3人 「……。」

小夜吉 「なによ、これ……。」

愛彦 「スパイだ。」

小夜吉 「え？」

愛彦 「スパイ同士の通信だよ。」

慎太郎 「俺も漫画で読んだぜ。日本はスパイ天国なんだよ。いろんな国のスパイがすごい数いるんだ。」

小夜吉 「さっきのが？」

愛彦 「おとし出来た盗聴法案も、実はスパイ対策なんだってインターネットで言ってたよ。」

慎太郎 「俺達の知らない所で、こういう戦いがあったとは。」

小夜吉 「バカじゃない。漫画の読みすぎよ、二人とも。」

愛彦 「いや、そう考えると八丁堀先生の謎のバイトも理解出来る。」

小夜吉 「なんでよ。」

慎太郎 「そうか、雑誌記者の事、敵って言ってたしな。」

愛彦 「八丁堀先生は敵に協力するフリをしてる二重スパイなんだよ。」

小夜吉 「何よ敵って。男子ってなんでそんな下らない事をマジメに言えるわけ？
とにかく今は、2年前の事件を解決するのよ。」

う、うんって感じで事件について話し出す3人。音楽。

小夜吉 「フラリ、バタ。
慎太郎 「フラッ、バタン。
愛彦 「フラフラ、バタリ。

しばしの間。

3人 「はっ！

慎太郎 「どうしたんだ、俺。

小夜吉 「頭が痛いわ。

愛彦 「あつ、なんだこれ。

慎太郎 「え？

愛彦 「これ、小夜吉が書いたの？

小夜吉 「さあ。

愛彦 「すごいぞ、僕たちの知った事をふまえて、ちゃんと小説になってる。しかも推理まで完璧だ。見てよ、これ。

慎太郎 「なんだと。おお！本当だ。

愛彦 「どうしてだろう。

小夜吉 「ミステリーを書こうとしてる私達の方がミステリーね。

慎太郎 「何にしてもよくなってるんなら、いいじゃないか。

愛彦 「でも……。これ読んだら2年前に死んだセンパイが何故死んだのか、一目瞭然だ。

慎太郎 「ホントだな。でもホントか、これ？

愛彦 「ホントかどうかわからないけど、小説としては完璧だよ。

小夜吉 「野火君、ちよつと字書いてみて。

愛彦 「サラサラ。

小夜吉 「大豪田君も。

慎太郎 「なんだよ、サラサラ。

小夜吉 「私達の誰とも筆跡が違う。一体誰が・

慎太郎 「盗聴だ。

二人 「え？

慎太郎 「誰かが俺達を盗聴してるんだ。

愛彦 「そんな。

慎太郎 「俺達だってこんなに簡単に盗聴出来るんだぞ。盗聴してる俺達を盗聴してる人間がいたっておかしくない。前に小夜吉がやったみたいに。

3人、警戒する。

小夜吉 「そういえばさつき3人とも気を失ってたわ。

愛彦 「きつとその間にこの文書を。

慎太郎 「くそっ！おいコラ！聞いてやがんだろ！なんとか言え！

小夜吉 「そうよ！なんとか言いなさいよ！出て来なさい！
愛彦 「そ、そうだ！出てこい！」

3人、怖くなり泣きそう。

慎太郎 「出てこいよ！コラ！」

愛彦 「出てこい！この野郎！」

小夜吉 「出てきなさいよ！もう！」

叫んだとたん、ふいに現代に変わる。

慎太郎、愛彦は中学生のままストップ。

二宮出てくる。

二宮 「で、その先輩達3人を盗聴してたのが、マカベシンジなんですか？

小夜吉 「そうじゃないわ。」

二宮 「良く分からないんですけど。」

小夜吉 「あんたが小説好きだって言うから、あった事から順番に話してるんだけど。
結論から言うよね、マカベシンジってのはここにいたの。」

と、自分の頭部を差す。

二宮 「は？」

小夜吉 「こっからはちよつと信じられない話になるの。私も未だに納得してるわけ
じゃないわ。」

二宮 「はあ。」

小夜吉 「私達が初めてマカベシンジと会ったのは、夏の、林間学校だったわ。」

小夜吉、二宮去っていく。

中学時代に戻り、ストップしていた慎太郎と愛彦、逃げている。

慎太郎 「こっちだ！」

愛彦 「どうなってるんだよ！」

慎太郎 「見つかっちゃまったんだよ！」

愛彦 「何が？」

慎太郎 「これが！」

慎太郎の手には、犯人の書かれた小説。

愛彦 「えっ。」

八丁堀、出てくる。

八丁堀 「ここにいたの。」

慎太郎 「くそ！」

愛彦 「八丁堀先生。」

八丁堀 「先生の部屋まで来てもらうわよ。先生ちよつと読ませてもらったけど、それは中学生が読んでいい物じゃないわね。どうやって手に入れたのか、説明してもらいます。」

慎太郎 「俺達知ってるんですよ、先生。」

八丁堀 「あら、何を？」

慎太郎 「先生が、ただの教師じゃないって事を。」

八丁堀 「ふふん、セクシー女教師だって事かしら？」

慎太郎&愛彦 「ふざけるな！」

八丁堀 「知ってるなら分かるわね。渡しなさい。それは中学生には刺激が強すぎるわ。」

愛彦 「ちゅ、中学生だって。知ってしまったら、もう仕方ないんだ！」

八丁堀 「どうする気？」

愛彦 「そ、それは。分からないけど。」

八丁堀 「忘れなさい。今ならまだ助かるわ。」

慎太郎 「俺達も殺されるってのか。二年前の先輩みたいに。」

八丁堀 「四の五の言っていないで、渡すのよ！」

明智先生、出てくる。

明智 「どうかしましたか。」

3人 「!!!」

明智 「この二人が何か？」

八丁堀 「いえ、下らない物を持ち込んだものですから。」

二人 「・・・。」

明智 「ダメだぞお前ら。大方エロスな物だろうが、そんなのは先生が卒業式の時
に山ほどやるから・・・ん？どうした？」

二人、逃げる。

八丁堀 「待ちなさい！」

八丁堀、追いかける。

明智 「・・・。」

マカロニ出てくる。(別空間で盗聴していた)
マカロニのセリフが終わるまでに、明智退場。

マカロニ「マカロニより連絡。双子山中学の二重スパイに動きがある。目標は未確認だが、中学生が二人。なんらかの証拠品を持って逃走中と思われる。各班追跡、可能ならその証拠品を奪取。分かっていると思うが、二年前のようなマネはするな。

マカロニ、去る。

八丁堀出てきて、携帯のようなもので連絡。

八丁堀 「8の字より連絡。ケース13に新たな展開。至急、双子山中学及びその生徒、野火愛彦、大豪田慎太郎の自宅周辺に包囲網を要請。彼らの持つ文書は非常に危険です。そうです。まるで、二年前の再現です。

八丁堀去る。

山の中。

愛彦、慎太郎、逃げて来る。

愛彦 「どうしよう。

慎太郎 「逃げるしかないだろ。そうだ、小夜吉は。

愛彦 「それはダメだよ。小夜吉はまだ僕等の仲間だってバレたわけじゃない。

慎太郎 「でも、いつかバレる。迎えに行こう。

愛彦 「よせ！

慎太郎 「愛彦・・・。

愛彦 「僕等だけでなんとかしよう。今から山を下りて、この小説を警察に持って行くんだ。そうすれば

慎太郎 「相手はスパイだぞ。漫画で読んだが、警察にも仲間がいるはずだ。

愛彦 「そうかも知れないけど、小夜吉を巻き込むのはやめよう。僕等だけで何とかするんだ。

へりの音！

二人 「！

慎太郎 「くそ！

と逃げる方向からもへり！

二人 「うわあ！

愛彦 「こっちだ！

二人、逃げる。が、マカロニが登場、立ちふさがる。

慎太郎 「なんだ、オマエは！」

マカロニ 「フン、前に盗聴してたガキか。」

慎太郎 「え？」

マカロニ 「それに何が書いてあるのか、知りたいんだ。渡してもらおうぞ。」

マカロニ、手をシュツと上げる。

それを合図にポンチョ&テキーラ出てくる。

二人 「く・・・」

慎太郎 「愛彦、突然で恐縮だが後ろはガケだ。」

愛彦 「えっ？ほ、本当だ。」

マカロニ 「そうだ、後ろはガケだ。もう逃げられない。」

ポンチョ 「大人しく渡すのよ。」

慎太郎 「飛ぶぞ。」

愛彦 「飛ぶ？飛ぶって、大豪田君？」

慎太郎、愛彦と共に強引に飛ぶ。

慎太郎 「でやー！」

愛彦 「うわー！マンガじゃないのにー！」

マカロニ達3人 「しまったー！」

マカロニ達3人 去る。

二人 「ザッパーン！」

愛彦 「か、川で良かった。」

慎太郎 「ゴボツ・・・助ける愛彦、俺は泳げないんだッ！」

愛彦 「えっ！？僕もだよ。」

間。

二人 「うーわー！」

スーイと近づく猿飛。口に竹のような物をくわえている。

慎太郎 「こ、こいつは・・・！」

猿飛 「その文書を渡してもらおうぞ。」

愛彦 「な、何者だっ！

猿飛 「名は猿飛。どうしても渡さぬと言うなら死んでもらう。

慎太郎 「に、忍者か!？」

猿飛 「食らえ、忍法・濁流地獄！ひとりの猿飛が！3人！4人！5人！

5人に分身する。（役者の顔をコピーしたお面を被った役者が五人登場）

猿飛 「ぐるぐるぐるー！

と言いつつ、5人が二人の周りを素早く回り、そのまま去る。

二人 「うわー！ゴボゴボゴボー！

猿飛 「見たか。分身の術を使い、一挙に5倍の渦を作るこれぞ忍法・濁流地獄！
大人しくその文書を渡せばよし、さもなければこのまま濁流の中でもだえ死ぬ事となるぞ。

愛彦 「だ、誰が渡すか。

猿飛 「ならば、そのまま溺れ死ぬがよいわ！わーっはっはっはっ、ゴボッ！

ん！？ゴボ・・・ゴボっ！？な、何者かが私の竹筒に指を！い、息が・・・ぐわー！

猿飛去る。竹筒に指を突っ込んでいたのは、小夜吉だった。

小夜吉 「危ない所だったわね。

既に陸にあがり、息の荒い二人。

慎太郎 「助かったぜ。

小夜吉 「宿舎を抜け出すのに、手間取ったの。何がどうなったかは盗聴してバッチリよ。早く逃げましょう。

愛彦 「どうして来たんだ！これじゃ君まで追われる事になっちゃうじゃないか！

小夜吉 「な、何よ・・・私達、友達なんですよ。

愛彦 「だからって！殺されるかも知れないんだぞ！

小夜吉 「こ、殺されるとかそんな事関係ないわよ。

愛彦 「関係あるんだ！

小夜吉 「と、友達を仲間外れにしたら、いけないんだからー！

小夜吉、泣き崩れる。

愛彦 「小夜吉・・・。

慎太郎 「・・・愛彦、・・・小夜吉。

慎太郎、二人の手を取り、握手させる。

慎太郎 「お前達は、・・・友情だ。

愛彦 「日本語が間違ってるよ、大豪田君。

ヘリの音！

3人 「ハッ！

慎太郎 「いかん、逃げるぞ！

3人、走る。

八丁堀、猿飛、ヘリ操縦。

二人 「バラバラバラバラバラ。

八丁堀 「やっつと見つけたわよっ！アラ、あの小娘も仲間だったの？

猿飛 「あやつか、私を窒息させたのは。ネット用意！発射！

八丁堀 「ぼちっとな。

発射音。

二人 「バラバラバラ・・・

二人、去る。

3人 「（上を見て）うわー！ネットが！

小夜吉&慎太郎 「とう！

愛彦 「わー！

愛彦、ネットに捕まる。

二人 「野火君！&愛彦！

愛彦 「僕の事はいい！早く逃げろ！

慎太郎 「そうはいくか！

小夜吉 「絡まってとれないわ！

愛彦 「いいんだ！逃げろ！

猿飛、出てくる。

猿飛 「覚悟！

3人 「わー！

猿飛、走り抜けつつ切る。シャキーン！

愛彦 「やった、ネットが切れたよ。
二人 「逃げろ。」

愛彦ら3人去る。

猿飛 「しまったー！

八丁堀ゆっくりと出てくる。

八丁堀 「猿飛さん・・・。

猿飛 「あつちに逃げたぞ。」

八丁堀 「見えました。」

二人 「・・・。」

猿飛 「待てー。」

二人、去る。

と、すぐ愛彦に3人出てきては、マカロニ軍団三人に取り囲まれる。

3人 「！！

マカロニ軍団三人は全員銃を構える。

マカロニ 「言っておくが、我々は中学生でもためらわずに撃つ。」

二宮 「とつとと渡しなさい。」

落田 「さあ。」

3人、流石に銃にはびびってる。

慎太郎 「くそ。」

愛彦 「もうだめだ。」

小夜吉 「諦めないで。」

マカロニ 「いいや、諦めろ。（銃を向ける）

3人 「ひっ

その時、三人の頭の中に声が響く。（三人にしか聞こえない）

声 「思い出すんだ。」

3人 「えっ？」

声 「この場所は昼間に通ったハイキングコースだ。」

小夜吉 「誰？」

マカロニ 「非協力的だな、顔も見られた事だ。死んでもらう。」

愛彦 「思い出した。ここは・・・」

慎太郎 「そうか。」

小夜吉 「そうね。思い出したわ。」

マカロニ 「寝言に付き合ってるヒマはない。やれ。」

その時、ヘリが！

マカロニ達 「わ！！」

小夜吉 「今よ！」

3人、走る。スローモーション。

愛彦 「僕たちがつつ込んだ茂みの向こうには！

小夜吉 「今は使われていない貨物列車のトンネルがあるはず！

慎太郎 「その距離、およそ10メートル！

マカロニ達 「むわとえー（スローモーションだから）

発砲もゆっくくり3発。

3人 「ぬおおわあああー。 （撃たれてびびってる）

慎太郎 「とおべええー

3人、飛ぶ瞬間にスローモーション切れ、間髪入れず去る。

その際、文書（10枚くらい）はまき散らされる。

マカロニ 「しまった！

落田 「でも待って下さい。あいっらこれを置いて行きました。」

ポンチョ、テキーラ、文書を拾いマカロニに渡す。

マカロニ 「（読んでる）ふん、ふん。ふんふんふんふんふん。なるほど。引き続

きあの3人を追うぞ。

ポンチョ 「どうして？文書は手に入ったのよ。警察に逃げ込んだって子供の話を
んて信用されないわ。」

マカロニ 「この文書には2年前の事件の全容が書かれてる。
ポンチョ 「えっ。

マカロニ 「ようやく研究の正体が見えて来た。新しいサンプルが誕生してる。名前はマカベシンジ。あの3人を追っていけば、必ずそいつにたどり着けるはずだ。

3人出てくる。

愛彦 「そして僕たちはバイクを盗んで帰って来た。

小夜吉 「ブイーン！大豪田君、急いで！

大豪田だけ走ってる。

慎太郎 「お前を殺す！絶対！

愛彦 「小夜吉！

小夜吉 「なに？

愛彦 「あの小説ぶちまけちゃったけど、どうする？

小夜吉 「ほら、これ。

ディスクを取り出す。

小夜吉 「あの小説全部データにしておいたの。

愛彦 「そうか、やった。

慎太郎 「なかなかやるじゃないか。女のくせに。

小夜吉 「大豪田君。

慎太郎 「え？

小夜吉 「とばすわよ！ブイーン！

慎太郎 「お前、絶対殺すからな！

小夜吉 「ブイーン。

小夜吉の家。小夜吉がパソコンしている。

小夜吉 「カチャカチャ・・

慎太郎 「・・ハアハア・・

愛彦 「小夜吉の家って、安全なのか。

小夜吉 「大丈夫よ。前に大豪田君が忍び込んで来てから、セキュリティシステムを改善したの。

慎太郎 「前もドーベルマンが襲って来たり、落とし穴が無数にあったりで死ぬかと思っただけだな。

小夜吉 「もっと凶悪なものに変えたのよ。ゲシシシ。

二人 「……」。

小夜吉 「さあ、この文書を新聞社に送るわよ。」

二人 「えっ」

愛彦 「新聞社って」

小夜吉 「警察がダメなら、第4権力。マスコミで大々的に取り上げられればスパイ組織も手出し出来ないわ。」

慎太郎 「なるほど！」

愛彦 「それは思いつかなかった。」

セキュリティの作動する音。

3人 「！」

小夜吉 「セキュリティシステム！ポチツとな！なにこれ、何者かが屋敷に侵入しようとしている。」

慎太郎 「ヤツラだ。」

愛彦 「やっぱりここもダメか。」

小夜吉 「さっき言ったでしょ。この家にはものすごく凶悪な罠が一杯しかけてあるの。ちよつとやそつとじゃ入って来れないわ。」

愛彦 「とにかくこの文書を新聞社に送ろう。」

と、その時、大豪田&愛彦の手が小夜吉の肩に触れる。

小夜吉 「うん。カチャカチャ・・」

慎太郎 「フラフラ、バタ。」

小夜吉 「え？大豪田君？」

愛彦 「フラリ、バタン。」

小夜吉 「野火君！また気絶！？こんな時に・・フラッ、バタリ。」

しばしの間。

3人 「ハッ！」

慎太郎 「どうしたんだ、俺？」

小夜吉 「頭が痛いわ。」

愛彦 「あつ。なんだこれ。（とパソコンの画面を見る）

小夜吉 「なにこれ・・マカベシンジより僕の頭脳達へ？」

慎太郎 「おい。前の小説と違うぞ。」

小夜吉 「前の小説より、バージョンアップしてるわ！」

慎太郎 「そんなバカな！」

愛彦 「僕等がここに来た時間は？」

小夜吉 「午前8時ごろ。」

慎太郎 「パソコンの表示は、今、正午前だ。
愛彦 「ということは。」

小夜吉 「私達、4時間も気絶してたの!? 侵入者は? ・ ・ ・いた、この部屋に向かっ
て来てる。一つ目の罫が通過されたわ。」

慎太郎 「また盗聴されたんだ。それでまた俺達が気絶してる間に。」

小夜吉 「それはないわ。この部屋が開けられた形跡はないもの。」

愛彦 「そうだ、盗聴されたんじゃない。」

二人 「えっ?」

愛彦 「あの声、覚えてる?」

慎太郎 「あの山の中で聴こえた声か?」

小夜吉 「やっぱりみんなにも聴こえてたのね。」

愛彦 「見て。小説の最後にPSが新しくつけられてる。」

慎太郎 「PS?」

愛彦 「PS、僕の親愛なる頭脳達。君達3人がいなければ僕は生まれる事はな
かった。そして、問題をありがとう。僕は上手く解けただろうか。」

小夜吉 「な、何よ、これ。」

愛彦 「この小説を書いたのは、あの声の主だ。」

二人 「え?」

慎太郎 「誰だよ。」

愛彦 「わからないけど、きっとそうだ。さっき気絶した瞬間、僕たちがやっ
た事はなんだった?」

慎太郎 「俺はパソコンを見てた。」

愛彦 「それから?」

慎太郎 「それから・ ・ ・こうやって小夜吉の肩に手を置いて」

小夜吉 「ちよつと待って。また気絶したらどうするの。スパイが迫って来てるのよ。」

愛彦 「それはそうかも知れないけど、でもたぶん。」

小夜吉 「たぶんで行動しないでよ。」

愛彦 「これが正解なんだ。」

愛彦、小夜吉の肩に触れる。

その瞬間、照明・音響、何か効果を。

声だけの存在、マカベ。

マカベ 「やあ、また会えたね。」

小夜吉 「なに・ ・ ・これ・ ・ ・?」

マカベ 「僕は、マカベシンジ、君達の4人目の仲間だ。」

小夜吉 「マカベ・ ・ ・、私達の考えた?」

マカベ 「生み出したというべきだろう。何故こんな事が起こったのかは僕にもわか
らないが、僕は君達3人の頭脳に存在している。」

慎太郎 「お前は一体誰なんだ、俺達の話盗聴してやがったな。」

マカベ 「君達が体験した事は全て僕が体験しているのと同じなんだ。僕にも信じられないけど君達が僕で、僕が君達だ。」

慎太郎 「わけわかんない事言ってるんじゃないかねえ。」
マカベ 「多重人格というのは分かるだろう？元々一つの人格が幾つにも分裂してしまふ。分かりやすく言うなら、僕はその逆、つまり元々別々の物だった君達3人の人格が、何かのきっかけで一つに合体した合成人格だ。」

慎太郎 「そんな事・・・」
マカベ 「あるはずがないと僕も思う。だが僕は存在している。そうだ、さっき小説を手直しするついでにインターネットでIQテストというのをやってみた。当たり前だが僕のIQは今の所地球上で一番高い。」

愛彦 「当たり前？」
マカベ 「君達3人の脳が合体したんだ。単純に考えて、僕は通常人の3倍の大きさの頭脳を持っている事になる。誰も僕には勝てないだろう。愛彦君、僕は本当に君のドラえもんになれるんだ。」

愛彦 「ドラえもん？」
マカベ 「僕は君が望む物を何もかも与える事が出来る。君が小説家になりたければ僕は歴史上で最も重要な小説を描く事が出来るだろう。政治家になりたいのなら、僕は人類にとって最も効率のいい政治体系を生み出す事が出来るだろう。しかるべき知識さえ君達が与えてくれるなら。」

愛彦 「何が望みなんだ。」
マカベ 「僕はメフィスト・フェレスじゃない。僕の望みは君の望みだ、愛彦君。君は僕のそういう部分を担っているんだから。」

愛彦 「・・・」
マカベ 「また会おう。僕は君達が好きだ。」

3人 「はっ！」

3人、我に返る。同時にマカベシンジの効果、消える。

小夜吉 「夢？」
慎太郎 「いや違う。画面を見てみる。」
愛彦 「手紙？マカベシンジより。（現代の愛彦のナレーションとして）僕は今でも、その僕たち宛てのマカベシンジの手紙の文章を覚えている。」

セキュリティの音。

小夜吉 「ダメ、もうすぐ侵入者がここに来るわ。」
マカベ（声） 「君達の内誰の記憶なのかは分からない。」
小夜吉 「とつとつこの小説を新聞社に送りましょう。あれ？」
慎太郎 「どうした。」

小夜吉 「回線が切れてる。電話線が切られたわ！」

マカベ (声) 「おそらくはバラバラとめくっただけで、手に取った事さえ忘れてしまった本の一行だろうと思われるが、僕にはその言葉を思い出す事が出来る。」

愛彦 「さ、小夜吉！あの赤いのって、燃えてるんじゃないや

小夜吉 「火イ！？よくも人ん家に火イまで着けてくれたわね！」

慎太郎 「落ちつけ！」

小夜吉 「私のおうちに火イ着けた事を後悔させてやる！私はね、おうち大好きなんだから！」

慎太郎 「マッハパンチ！」

小夜吉 「ゴフ・・」

小夜吉、腹を殴られ気絶。それを抱える慎太郎。
3人、逃げてゆくマイム。(その場で)。

マカベ 「『君にふりかかる事全ては訓練である。訓練である事を自覚しておけば、君はそれをもっと楽しむ事が出来る。リチャードバック』願わくば僕たちの冒険が素晴らしい結末を迎える事を祈る。」

途中で、小夜吉目覚めて3人で逃げる。

小夜吉 「こっちよ！」

3人去る。

同時にマカロニ、ポンチョ、テキーラ現る。

ポンチョ 「西館に突入したB班、ベンガル虎の奇襲を受け全滅。」

テキーラ 「C班は依然、巨大ワニと交戦中です。」

マカロニ 「なんなんだ、この家は！ムチャクチャじゃないか！なんで虎とかワニとかが放し飼いなんだよ！」

マカロニの背中にはピラニアが何匹か食いついている。

テキーラ 「僕も、死ぬかと思いました。」

テキーラ何かを探りに一度はける。

その際、背中に巨大魚がガブリと食いついているのが見える。

ポンチョ 「(それを見て) 何故、死なないのかしら。」

言いつつポンチョも一度はける。
彼女の背中にも超巨大魚がガツチリと食い込んでいるのが見える。

マカロニ「お前こそ。
テキーラ「ガキは逃げましたね。
ポンチョ「ヘリは既に爆破したから、そう遠くへは行っていないはずよ。
マカロニ「テキーラ、お前はガキ共を探せ。
テキーラ「了解。

落田、去る。

マカロニ「ポンチョ、お前はそのコンピュータを探れ。
ポンチョ「わかったわ。カチャカチャ、ん？調べるまでもなく。
マカロニ「どうした。
ポンチョ「マカロニ、これを見て。
マカロニ「・・・マカベシンジ。前の小説より、良くなってる。やはりあの3人はサ
ンプルと交信してるようだな。

八丁堀、颯爽と登場。

八丁堀「そこまでよ。

二人「！！

マカロニ「こりやどうも八丁堀先生。

八丁堀「雑誌社の方がうちの生徒の家に何のご用かしら。

マカロニ「ちよつとした取材ですよ。先生こそ今日は家庭訪問ですか？

八丁堀「誰がこんな家に！

八丁堀、背中にかぶりついた大蛇を床にたたきつける。

八丁堀「名前を聞いておきましょうか。

マカロニ「俺の名はマカロニ。どこの国のスパイかぐらいは知ってるかな？内閣

安全保障室特務官、八丁堀ララ子。

八丁堀「そこまで知ってるとは正直、あなた達をなめてたわ。

ポンチョ「内閣安全保障室？どうしてそんなトコが動いてるの。

マカロニ「それだけ二年前の事件つてのは奥が深いしさ。

ポンチョ「確か国家の危機管理が主な役割の機関のはず。たかが中学生の自殺で

それが動くなんて

マカロニ「ポンチョ、お前が知るべき事じゃない。

八丁堀「あなたもね。教師として日頃鍛えた殺人チョーク、覚悟してもらおうわ。

マカロニ「二対一でか？

二人銃を構える。

八丁堀 「く！」

マカロニ 「やれ。」

二人、撃つ。

と同時に猿飛（スパイ）登場し、弾丸を叩き落とす。

猿飛 「内閣安全保障室直属、猿飛ななみ参上！」

八丁堀 「猿飛さん！」

猿飛 「八丁堀、修業が足りんぞ。」

八丁堀 「すみません。」

マカロニ&ボンチョ 「くそ、ジャパニーズ・クノイチ！」

猿飛 「国家百年の大計を乱す痴れ犬共め。家康公の御時より四〇〇年、闇の世界よりこの国を守り続けた我が一族の刃、とくと受けるがよい。くらえ！秘劍・岩石大裂斬！」

金五郎、何故か二組の間にそっと出てきていて

金五郎 「いらっしやいませ。」

ズバーツ！ 金五郎、猿飛に切られる。

猿飛 「しまった、民間人を。ご老人！大丈夫か！」

金五郎 「ゴフ・・・、私はもうダメでございます。」

猿飛 「それはそうだろう。岩をも切り裂く岩石大裂斬。人間の形を保っている事だけでも奇跡だ。しつかりしろ、ご老人！」

金五郎 「この老いぼれの最後の頼みですじゃ。このスイッチを押して下さい。」

猿飛 「お安いご用だ。ポチツとな。」

金五郎 「ありがとうございます。」

猿飛 「なぜ生身にスイッチがついているのだ、ご老人。一体これはなんのスイッチだ。」

金五郎 「自爆装置でございます。」

猿飛 「なんだと！？」

金五郎 「ボーン！ボーン！（ちよっとずつ爆発している）」

みんな 「うわー！」

テキーラ出てくる。

テキーラ 「地下に続く通路を発見。
ポンチョ 「テキーラ！」

テキーラ 「地下道は街まで続いているだけです。

八丁堀 「待ちなさい！」

金五郎 「ポーン。

マカロニ 「いい事を教えてやる。あんたが追ってきた文書はそのコンピュータ
ーにある。

八丁堀 「なんですって？

マカロニ 「あの三人はそれを新聞社に送ろうとしていたようだ。俺達の知った事じ
やないがな。

八丁堀 「猿飛さん、ケース13緊急事態です！

猿飛 「ピ。聴こえるか、本部！」

金五郎 「ポポーン！お嬢様、楽しそうにお友達のお話をされるお嬢様を一目見る事
が出来、やっとこの老骨も旦那様に会いにゆけます。お嬢様、どうか！お
友達を大切に。ピ。チュドーン！」

爆発音。

暗転。

三人、地下道で盗聴している。

小夜吉 「金五郎ー！」

慎太郎 「あの爺さん生きてたのか。

小夜吉 「ええ、奇跡的に。

愛彦 「でも、どうして自爆装置なんか。

小夜吉 「私がおもしろがってつけてしまったの。

2人 「なんてことを。

小夜吉 「……。」

慎太郎 「とにかく急ごう。

愛彦 「うん。

小夜吉 「……。」

慎太郎 「おい、小夜吉。

小夜吉 「……ちよつとだけ待って。ちよつとだけ。

二人 「……。」

愛彦 「小夜吉にはもう帰る家もなく、唯一の家族であった執事のお爺さんも死ん
でしまった。小夜吉は本当に一人ぼっちになってしまったのだ。14才の
僕のガラクタのような心には、こんな時にかけてあげる言葉の一つも浮か
んでは来なかった。僕の中に言葉はない。言葉が欲しいと、本気で思った。
天空に溢れる誰かの言葉の全てを集めて、借り物でもいいからそれを自分
の物にしたいと本気で願った。

人間について少しだけ知った今なら分かる。僕は彼女にこう言えば良かったのだ。『大丈夫、僕がついてる。』と。

慎太郎 「・・・でも。行かないと。」

小夜吉 「うん。」

愛彦 「・・・」

小夜吉、パツと明るく立ち上がり。

小夜吉 「さあ！早く行きましょう！街まで行けばインターネットでこれを送れるわ。

どっちが街の方かしら？

慎太郎 「地下道だからな、よく分からん。」

小夜吉 「カベに矢印があるわ。赤と青。」

慎太郎 「・・・」

愛彦 「ど、どっちにしようか。」

小夜吉 「じゃあ、赤！」

愛彦 「よし。」

小夜吉、愛彦、上手に。慎太郎のみが下手に。

愛彦 「どうしたの。」

慎太郎 「お、おう。そっちなか。」

二人、去る。

現代。

柱に文字、舞台後方に二宮&小夜吉。

アカイソラ

ユウグレノムコウ

キミノコエガキキタイ

ダレカノコエガキキタイ

ソバニダレモイナイカラ

二宮 「マカベシンジがセンパイ達3人の合成人格・・・確かに信じられない話です

ね。

小夜吉 「だから言ったでしょ。」

二宮 「で、どうなったんですか。」

小夜吉 「なんとか新聞社にその文書を送ることが出来たわ。」

二宮 「それで？」

小夜吉 「その小説はマスコミに大波紋を呼んで、私の中学の用務員、阿部正一（4才）が捕まったの。」

阿部正一 & 刑事出てくる。

阿部 「濡れ衣ですか・好きな言葉ですねえ。
刑事 「来い！」

阿部 & 刑事去る。

二宮 「それ誰なんですか！今までの話に全然出てきませんでしたよ！私、ミステリーのオチで一番許せないのって犯人が「誰やねん！お前！」ってのなんですよねっ！」

小夜吉 「文句多いわね、あんた。あんたが先知りたがったから端折ったんでしょ！」

二宮 「ミステリーファンとして、それ絶対許せません！」

小夜吉 「大豪田のアジトが近いのにでかい声だしてんじゃないわよ！」

二宮 「先輩こそ！」

二人 「しーーーーー！」

静かに話す。

小夜吉 「あのねマカベシンジが書いた小説では、そのおっさんは途中までいわゆるミスディレクションとして登場してたの。」

二宮 「ミスディレクション、つまり間違った犯人なんですね。」

小夜吉 「だけど、事件の真相を指摘した部分は削除されて、その用務員のおじさんが捕まったわ。」

二宮 「どうして。」

小夜吉 「メールなんて傍受されて内容を書き換えられるのくらい当たり前でしょ。それをやられたの。」

二宮 「じゃ、じゃあ真犯人は。」

小夜吉 「自殺は自殺よ。犯人はいない。強いて言うなら、そこまで追いつめたスパイ組織が犯人ね。」

二宮 「ただの中学生にどうしてそこまで。」

小夜吉 「！明智先生・・」

二宮 「いて。（後ろ歩いててぶつかった）」

小夜吉 「まざったわ。まず明智先生を探し出すべきだった。」

二宮 「えっ？」

小夜吉 「とにかく行くわよ。」

二宮 「はい。」

2人 「ガチャバーン！」

二宮 「警察よ！」

小夜吉 「いない！」

二宮 「感づかれたんでしょか。

小夜吉の携帯が鳴る。

小夜吉 「・・・はい、大和屋です。

落田出てくる。

落田 「あのホームページの作者を見つけました！

小夜吉 「えっ

落田 「作者は都内の特別学校に通う中学生なんですが。

小夜吉 「ちよつと待って、中学生？

落田 「はい、信じられませんがそんなんです。この特別学校というのがですね

小夜吉 「そんなことよりその子の居場所は？

落田 「それが同級生2人と共に1月前より行方不明。HPの更新も都内の様々な場所から行われていて特定は

小夜吉 「とにかく都内にいるのね？

落田 「ええ、しかし

小夜吉 「二宮！都内全域に緊急配備！

二宮 「ぜ、全域ってそんな・

小夜吉 「上には私がかげあうわ。

落田 「待って下さい。既に緊急配備されています。

小夜吉 「えっ

落田 「今朝早く外出禁止令が出され、街は機動隊と自衛官だらけ。表向きは交通網の復旧工事の為ですが、ひよつとすると

小夜吉 「署ではそんな動きは無かったわ。

落田 「しかし、我々より早く上層部がこの中学生の情報を知っていて、先輩には知られたくなかったとしたら

ノイズ！

落田 「ぐわ！先輩！先輩！

小夜吉 「落田？どうしたの？落田君！？」

落田との通信が妨害される。落田消える。大豪田ご一行アジトに登場。

二宮 「大豪田！

慎太郎 「良いところで妨害されたな。

小夜吉 「あなたなの？

慎太郎 「いや。

小夜吉 「つかんだ情報を全部渡して。」
慎太郎 「こっちはそれが商売だ。全部ってわけにゃいかねえが、今の中学生3人の情報と交換って事で1つ教えてやる。何が知りたい？」

小夜吉 「明智先生。」

慎太郎 「そう来ると思った。」

手下MDを出す。

二宮 「先輩気をつけて。」

慎太郎 「あの頃俺達の中学はラジオドッグ達の注目の的だった。毎日スパイ達が生かしのぎを削ってたからな。ラジオドッグが盗聴した2001年の双子山中学の記録は五万とある。その中で、一つ面白いのを見つけた。」

小夜吉 「なんなの？」

慎太郎 「聴かせてやる。日付は俺達がいなくなった林間学校の一週間後。これが明智先生の正体だ。」

小夜吉 「えっ？」

慎太郎 「聞け。」

手下1、ちっちゃいMDプレイヤーのボタンを押す。落語が流れる。

全員 「・・・。」

手下1 「間違えました。」

慎太郎、手下1をしぼく。

小夜吉 「無駄なおちやらはやめて！」

慎太郎 「おちやらけって言うな！」

手下1 「こっちはです。」

慎太郎 「聞け！」

慎太郎、MDのスイッチを押す。

中学時代。学校。分かりやすくチャイム。明智先生、出てくる。

明智 「・・・。」

マカロニ出てくる。

マカロニ 「明智先生ですね。」

明智 「あなたは」

マカロニ 「雑誌社の者です。大変な事になりましたね、2年前の生徒の自殺が実は」

殺人事件だったなんて。

明智 「何も答え出来ません。では。」

マカロニ 「調べさせてもらいました。先生は12年前まである研究所に勤めてらっしゃったようですね。12年前、つまり1989年。」

明智 「それが何か。」

マカロニ 「89年。この年はあらゆる意味で崩壊の年でした。昭和天皇崩御、天安門事件、ベルリンの壁が崩れ、そして冷戦終結。」

明智 「あいにく私歴史の教師じゃないんで。」

マカロニ 「冷戦が終わり、様々な軍事プロジェクトが途中放棄されました。中には成果を上げたものもあったでしょうが、全て過去の遺物として捨てられた。だが、研究は捨てられても研究者は生きている。生み出された技術は存在している。」

明智 「なんの話です？」

マカロニ 「カーナビ、インターネット、衛星電話。生み出された技術の幾つかは一般に普及するまでになりました。だがそれ以外は？途中放棄されたままのプロジェクトはその後、どうなったんでしょうか？・・・私ね、スパイなんですよ。」

明智 「えっ。」

マカロニ 「私と貴方は同類なんです。あの時代の化石だ。親近感さえ覚えます。」

明智 「・・・。」

マカロニ 「貴方が進めていた研究はその後、どうなったんです？」

明智 「私の研究は軍事的では・・・。」

マカロニ 「貴方は独自に研究を進め、幾つかのサンプルを生み出した。生徒を使った人体実験だ。」

明智 「それは違う。」

マカロニ 「マカベシンジってのは何者です。あの3人のガキとどうやって連絡してるんです。」

明智 「3人？まさか。」

八丁堀、出てくる。

八丁堀 「校内は学校関係者以外立ち入り禁止です！」

明智 「八丁堀先生？」

マカロニ 「またお会いする事になると思いますよ、明智先生。では。」

マカロニ、去る。

八丁堀 「先生、何かお話になられたんじゃない？」

明智 「いえ別に。」

八丁堀 「そうですね。一夜明けたら警察は来るわ、マスコミは来るわ。先生はマカ

ベシンジという名前に何か心当たりは？

明智 「あれですか。犯人を指摘した小説を書いたっていう・・・」

八丁堀 「今マスコミはその少年を必死で探してるそうです。天才少年だとか持ち上げてる」

明智 「それより私は将棋部の3人の方が気になります」

八丁堀 「3人とも林間学校から行方不明。マスコミが感づくと面倒になりそうですわね」

明智 「私はその3人が友達になればいいと思っただけなんです・・・」

八丁堀 「え？」

明智、急ぎ足で去る。

八丁堀 「明智先生？今なんと？」

八丁堀去る。

現代（未来？）に戻る。

小夜吉 「何、これ？」

慎太郎 「聴いた通りだ」

小夜吉 「明智先生の研究ってなんなの？」

慎太郎 「わからんが、俺達を実験台にしたならマカベシンジは明智先生が作ったことになる」

小夜吉 「そんな。今どこにいるの？」

慎太郎 「10年前から行方知れず。俺達でも見つけだせなかった。だが」

爆音。

みんな 「！」

愛彦倒れ出てくる。

愛彦 「ぐ・・・っ」

小夜吉 「野火君・・・？」

八丁堀（現代バージョン）出てくる。

八丁堀 「お久しぶりね、2人共」

慎太郎 「お前は」

小夜吉 「八丁堀先生？」

八丁堀 「なつかしい呼び名ね。大塚田君、このアジトは包囲させてもらったわ」

慎太郎 「なんだと。」

八丁堀 「それから大和屋さん。あなたは本日づけで私の下に転属になりました。」

小夜吉 「えっ」

八丁堀 「つまり内閣安全保障室直属となります。辞退は認められません。株価の不正な操作、公共施設への悪質なハッキング。国家規模の危機です。直ちに大豪田慎太郎及び野火愛彦と協力し、連結脳実験体を捕まえてもらいます。」

小夜吉 「連結脳？まさか」

愛彦 「今度のマカベシンジは彼らが作り出したんだ。」

慎太郎 「なるほど。」

八丁堀 「残念だけど、彼らを捕まえるのは、同じ事が出来るあなた方以外には不可能だわ。」

小夜吉 「ダメよ。」

八丁堀 「拒否権はありません。マカベシンジとやらを出現させなさい。」

小夜吉 「マカベシンジは、マカベシンジはあなた達が考えているよりずっと危険なのよ！」

フェードアウトするように、場面が消える。

中学生1、2、3、呑気な感じで出てくる。

(オリジナル配役は二宮役、落田役、金五郎役)

中学生1 「追手はうまく巻いたみたい。」

2 「ががが、学校のみんな心配してないかな。」

1 「あの学校は悪い学校だったの。マカベシンジが言ったわ。」

2 「でも」

3 「お腹減ったし」

1 「我慢して。」

2 「地下道寒いし」

1 「頑張るのよ。もうすぐみんなが幸せになれるんだから。」

3 「僕にご飯が食べれば幸せだよ。」

2 「(盗聴器で) 誰かが追ってくる音がする！」

1 「大変。手を出して。」

三人、手を重ねて。

1 「出てこい、マカベシンジ！」

テレパシー的表現として音響照明の効果。1、パソコンを凄く速さで打つ。

1 「わかった。あっちよ！」

2 「こいつなんでマカベシンジって名前なのかな。僕たち3人が合体してるのに。」

1 「知らない。
3 「先生達がそう呼んでたからだよ。連結脳実験体、コードネーム、マカベシン
ジって。」

1 「コードネーム・・・。
2 「マンガみたいだ！
2 & 3 「（うれしそうに笑う）あはははは。
1 「行きましょ。こつちよ。ん？また変な文章が残ってる。
2 人 「え？

暗転。

三人の声のみ

3 人 「アオイソラ・ソラノカナタ・

シーン3

壁に文字が映し出される

アオイソラ
ソラノカナタ
ナニモキコエナイ
ナニモナイ、ボク

カーソルが点滅し・・・消えた。

愛彦、小夜吉、慎太郎出てくる。どこかの空き屋。

慎太郎 「ここだ。

小夜吉 「盗聴器は？

慎太郎 「たぶん無い。

小夜吉 「わかるの？

慎太郎 「なんとなくな。パチン。よし、電気も通ってる。

愛彦 「こんな立派な空き屋があるなんて。

小夜吉 「あ！ 住むとなったら、色々買って来ないと。ホラ、家具とか。

慎太郎 「それは。

愛彦 「一応、僕たち逃げてんだし。

小夜吉 「料理は私に任せて。実は色々試してみたい料理があるの。海亀の丸焼き、熊の手の丸ごと入ったスープ、そして生きたままのサルの脳味噌の踊り食
いなどなどをね。」

愛彦 「そんな珍味は。」

慎太郎 「そうだ。逃亡中なんだぞ、珍味食ってどうすんだ！」

小夜吉 「楽しみましようよ。」

慎太郎 「馬鹿野郎、俺達は明日無き逃亡者なんだぜ。そうだ、風呂は任せろ。」

あこがれのドラム缶風呂にいられてやる。表にドラム缶あったな。

小夜吉 「おもしろそう、手伝うわ。」

愛彦 「お風呂ついてるじゃないか、この部屋。」

慎太郎 「少年の心を、忘れるなあああー！」

大豪田慎太郎、心の叫び。

愛彦 「だ、大豪田君？」

慎太郎 「生きてるうちにこんな漫画みたいなシチュエーションが何度やってくると思ってるんだ。もつと楽しもうぜ！」

小夜吉 「そうよ、楽しみましよう。」

愛彦 「君達は間違ってる！僕たちは殺されるかも知れないんだよ！」

慎太郎 「そんな事わかってるよ。」

愛彦 「わかってない！」

小夜吉 「少しは息抜きも。」

愛彦 「今逃げてきたばかりじゃないか！もう息抜きか！」

慎太郎 「落ちつけよ。」

愛彦 「二人とも、新聞を見ただろ！捕まったのは、用務員のおじさんでスパイ組織の事なんて何も書かれていなかった！あの小説が書き換えられたんだ。警察も僕等の話なんて信用してくれないし、マスコミだってそうだ。どうするか考えないと一生逃げ続けなきゃならなくなる。」

小夜吉 「じゃあ考えましよう。」

慎太郎 「そうだな。どうすんだよ。」

愛彦 「急に言われても。」

慎太郎 「じゃあ息抜こうぜ！」

愛彦 「ダメだつてば！」

小夜吉 「こうしましよ、マカベシンジに考えてもらおうのよ。」

愛彦 「小夜吉、信じてないんじゃない？」

小夜吉 「当たり前でしょ、あるわけじゃないわ。3人の脳みそが一個に合体するなんて。」

慎太郎 「なんでだよ。ゲッターロボみたいでカッコいいじゃねえか。ゲッター1！」

愛彦 「ゲッター2！」

小夜吉 「ゲッター3！いやよ、黄色はー！私、カレー食ってるデブ！？」

慎太郎 「それはキレンジャーだ。」

小夜吉 「とにかく、あんた達は漫画ばっか読んでる愚民共だから、信じてんでしょうけど絶対あるわけじゃないのよ。今から証明してあげる。手出して。」

2人、手を出す。

小夜吉 「行くわよ。」

3人の手を重ね合わせて

小夜吉 「ホラ、なんにも起こらないじゃないの。フラフラ、ボタン。」

慎太郎 「小夜吉！ボタン。」

愛彦 「やっぱり本当だったんだ。バタ。」

3人、しばらく倒れているが、すつくと立ち上がる。

音響。

無表情のまま、愛彦はノートパソコンを開きキーボードを打つ。

2人は盗聴を始める。

元の位置に戻り、倒れる。

3人 「はっ!？」

慎太郎 「どうしたんだ、オレ。」

小夜吉 「お腹が減ったわ。」

愛彦 「はっこれは？」

2人 「え？」

愛彦 「問題をありがとう。全て解いておいた。出来れば3人で経済を勉強して置いて欲しい。僕は今、経済に興味がある。マカベシンジ。」

慎太郎 「やっぱり本当の事なんだよ。」

小夜吉 「見て、あれから半日以上経ってるわ。」

愛彦 「文書が残ってる。」

慎太郎 「なんだ？東京タワー電波ジャック計画？」

小夜吉 「開きましょう。」

愛彦 「カチャ。」

3人 「.....」

慎太郎 「そうか、これなら。」

小夜吉 「マスコミも警察も関係ないわ。」

愛彦 「僕等は助かる。」

3人 「.....」

愛彦 「ん？」

慎太郎 「どうした？」

愛彦 「インターネットに接続してみたんだ。ブックマークが残ってる。何を見
てたんだ？カチャ。」

小夜吉 「証券会社？」

慎太郎 「銀行？」

愛彦 「待つてくれ。マカベシンジの口座が開設されてる。
二人 「え？口座？

愛彦 「だ、大豪田君。これ、0が何個ある？

慎太郎 「8個。

小夜吉 「1億円ね。

3人 「……………」

2人、同時に。

愛彦 「うわー！うわー！

慎太郎 「やったー！やったー！

小夜吉 パソコンを奪う。

小夜吉 「大変よ。このお金、どつかの会社のお金をパクツたみたい。
二人 「え？

小夜吉 「銀行のコンピューターをハッキングしたのよ。小学校の時に一回やった事
があるの。途中でバレたけど。

慎太郎 「どういう小学生なんだ。

愛彦 「てことは、犯罪？

小夜吉 「凶悪犯罪ね。しかも株を買ったりしてる。ちよつと待つて、一億円どころ
じゃないわ。マカベシンジが盗んだお金は・

愛彦 「だ、大豪田君。これ、0が何個ある？

慎太郎 「10個。

小夜吉 「ざつと800億円。いろんな企業の口座から盗んでるわ。それをほとんど
株につっこんでる。

愛彦 「こ、これって僕良くわからないけど

慎太郎 「なんとなく、絶対マズいな。

小夜吉 「私にも詳しくは分からないけど、多分、ムチャクチャな事になるわ。

3人 「……………」

愛彦 「マ、マカベシンジと話そう。

2人 「え？

愛彦 「前に一度話せたろ。もし何かしようとしてるんなら、止めないと。

3人、手を合わせる。

照明、音響、何か効果を。

マカベ 「やあ。

愛彦 「何をしようとしてるんだ。

マカベ 「君の望む事だよ。僕の望みは君の望みだ。

愛彦 「僕はお金なんて欲しくない。
マカベ 「僕も欲しくない。

愛彦 「じゃあ一体。

マカベ 「これは、君が望んだ事だよ。君は意識していないかも知れないけど、
愛彦 「一体何をやる気なんだ。

マカベ 「世の中をメチャメチャにするんだ。

愛彦 「え？

マカベ 「それが君の望みなんだよ、愛彦君。

愛彦 「・・・そんな・・・

三人の中の主導の意識が変わる表現として、ローテーション風に場所移動。
(話してる者以外は、眠っているかのように俯き目を閉じている)

小夜吉 「そんな事、やめて。

マカベ 「僕にもどうしようもない。

小夜吉 「どうしてよ。

マカベ 「存在意義の問題だ。望みを叶えられないなら、僕の存在する意味が無くな
つてしまう。

小夜吉 「いいでしょ、意味なんて無くなったって。

マカベ 「僕には意味しかないんだよ。自分が本当に存在しているかどうか不安なん
だ。

主導の意識が慎太郎に変わる。

慎太郎 「いいか。愛彦がどう思ったか知らないけど、本心じゃない。俺達は3人と
もそんなことしたくないんだ。

マカベ 「確かに君の望みじゃない。君の望みは知ってる。

慎太郎 「なんだと。

マカベ 「君の望みは・・・

慎太郎 「やめろ。

マカベ 「どうしてだい？君が愛彦君に言えば、彼は君の為に望んでくれるかも知れ
ない。彼が望めば僕はなんでも出来る。

慎太郎 「やめてくれ。

マカベ 「僕が言ってるやろうか。君の目はもう・・・

慎太郎 「やめろ！

3人、無理やりに接続を断ち切ったかのように、ふっとんだ。

現代に戻る。八丁堀の部下達(未来&現在の中学生3人と二宮&明智以外)
現代の三人を取り囲んでいる。

二宮 「先輩！」

八丁堀 「動かないで。非常事態宣言により警察機構は我々の指揮下に入ってるわ。

二宮 「一体どうしてわざわざこんな危険な物を作り出したんです。

八丁堀 「コードネーム・マカベシンジ。野火愛彦の小説によると名付け親は大和屋さんだったみたいね。

小夜吉 「明智先生は今どこにいるの？」

八丁堀 「亡くなったわ。

小夜吉 「えっ。

八丁堀 「10年前あなた達が失そうしてから、行方不明。彼はその間、研究を再開していたの。新しい着想を得てね。それを我々が受け継いだというわけ。

愛彦 「一体何の研究を。」

八丁堀 「馬鹿げた研究よ。いわゆる超能力、テレパシーの研究。

愛彦 「テレパシー？」

八丁堀 「『意識の壁に穴を開ける事が出来れば、他人の意識を垣間みる事も可能ではないか』その結果、生み出されたのは、ただリラックスしやすくなるくらいのことではない薬だった。研究は失敗、ところが

慎太郎 「ところが？」

八丁堀 「テレパシーによる脳の連結。あなた達が証明してくれた。壁の無くなった意識は一つに統合され、すさまじい能力を持った別の存在となる。

愛彦 「それが人間の自由になるもんじゃない事は分かっていたはずだ。

八丁堀 「確かにね。脳の連結を確認した途端、逃げられたわ。

部下 「室長、時間がありません。

八丁堀 「おしゃべりはここまで。マカベシンジを出現させてもらうわ。

小夜吉 「いやよ。

八丁堀 「なんですって？」

小夜吉 「解決はするわ。でもマカベシンジの力は使わない。

八丁堀 「それでかなうと思ってるの。

小夜吉 「私達はマカベシンジを封じ込める為に別々になったの。他に方法を思いつかなかったから。野火君が世の中をメチャクチャにやってしまったくないって言ったから。

愛彦&慎太郎 「・・・。

八丁堀 「何の話？」

小夜吉 「この2人が納得したって私はしない。別に現れたっていうなら丁度良いわ。私は私のままマカベシンジに勝ってやるの。

八丁堀 「どうやって。」

愛彦 「方法はある。

八丁堀 「国家反逆罪に問われるわよ。

慎太郎 「そろそろ逃げるか。

八丁堀 「あなたはマカベシンジを復活させるべきだと思ってるはずよ。

慎太郎 「人に言われてやるのは、俺の主義が許さねえ。
八丁堀 「子供なのあなた！
慎太郎 「いいや、少年の心を忘れない男さ。ぼちつとな！

天井付近が派手に爆発する。
取り囲んでいた部下たち、それに巻き込まれるように退場。

八丁堀 「これは！

慎太郎 「誰のアジトだと思ってたんだ。ナンバーワンラジオドッグ大豪田慎太郎のアジトだぜ。

愛彦 「さすが少年ジャンプ愛読者。

八丁堀 「くっ！動かないで！（と、銃を）

二宮 「貴女がです。

二宮、八丁堀に銃を向けてる。

小夜吉 「二宮！

二宮 「先輩！早く！

小夜吉 「ありがとう！

慎太郎 「抜け道がある。崩れてなきやいいけどな。

3人、柱後ろを通り前へ。二宮&八丁堀去る。
そこは既に抜け道。

小夜吉 「さっき言ってた方法って？

愛彦 「八丁堀先生に捕まる前に、書きかけの小説を送りつけておいた。マカベシンジのホームページにね。

慎太郎 「それで？

愛彦 「知りたいはずなんだ。人間を越える能力を持っていても。

小夜吉 「何の事なの。

愛彦 「小説を読んで一番面白い時はどんな時分かる？

小夜吉 「・・・書かれてる気持ちがあるあるって思う時？・・・そんな事より

愛彦 「そう。小説を読む一番の醍醐味は同じ事を感じている人間が他にもいると知る事だ。盗聴も人間の事をもっと知りたいからだ。明智先生のテレパシの研究も他人が考えてる事を知りたい。本当は何を感じているのか知りたい。そういう欲求が根本にある。

慎太郎 「つまりなんだ？

愛彦 「知りたいはずなんだ。人間を越える存在であっても、自分と同じ存在の事を。

3人、去る。と、同時に現代の中学生3人が出てくる。
キーンと効果の入ったマカベ状態で出てくる。

3人 「はっ！

3 「どこだ、ここ。」

2 「なんで勝手に現れるんだよ。マカベシンジのヤツ。」

1 「考えてるみたい。」

2人 「え？

1 「自分か何なのか考えてるみたい。見て。」

3 「ラジオドッグ？

1 「この送られてきた小説を読んでからずっと考えてるの。」

2 「僕も読んだけど僕らと同じ中学生3人の話なんだ。スパイに追われてマカベシンジも出てくるんだ。」

1 「最後はどうなるの？

2 「続きはまだなんだ。ほら

1 「P・S・この続きは本日、八時半よりリアルタイムでアップします。野火愛彦。」

2 「もうすぐ八時半だ。」

キーン。

3人 「うっ

1 「また勝手に。」

場面、消える。

野火はキーボード端末を手に。慎太郎、小夜吉も何かしらの端末を持ち、盗聴(?)している。

愛彦 「準備はいいかい？

小夜吉 「ええ。」

慎太郎 「考えたな、お前の小説をリアルタイムで発表。そのアクセスから居所を割り出すか。」

愛彦 「もう時間だ、始めるよ。カチャ、カチャカチャ

小夜吉 「何者かのアクセスを確認。」

愛彦 「来た。」

慎太郎 「ん？なんだ、こりゃ。」

小夜吉 「そんな。どんどんアクセスが増えていく。どうなってんの？

愛彦 「たぶん、マカベシンジが僕の小説をネットではらまいたんだ。自分の居場所を特定されないように。」

慎太郎 「野次馬か。」

小夜吉 「アクセス数が1000hitを越えたわ！」

慎太郎 「この中から見つけた。一番、ガードの固いやつだ。」

小夜吉 「くそ！」

愛彦 「カチャ、カチャカチャカチャ。」

慎太郎 「また増えやがった。」

愛彦 「どう？」

慎太郎 「黙って書いてろ！」

愛彦 「ああ。」

小夜吉 「途中で逃がしたりなんかしたら、あんた逮捕するからね！野火君！」

愛彦 「わかったよ。・・・でも、なつかしいな。」

小夜吉 「え？」

愛彦 「なんでもない。カチャ、カチャカチャカチャ。」

慎太郎 「こいつ・・・一人だけ、オランダ・韓国・アメリカを経由させてアクセスしてるヤツがいる。」

小夜吉 「そいつよ。逃がさないで、野火君。今からアクセスポイントを特定するわ。」

愛彦 「わかった。小説家の腕の見せ所だ。」

慎太郎 「夢中にさせとけよ。でた、品川方面！」

小夜吉 「こつちもよ。五反田の中継ステーション、ネット接続の反応は今700と少し！」

慎太郎 「そこから特定する！」

小夜吉 「野火君、まだ逃がさないでよ！」

愛彦 「わかってる！カチャ！カチャカチャカチャ！」

ストップモーション。

静かな音響。

以下のモノローグの間に慎太郎&小夜吉は、ゆっくりと退場していく。

愛彦 「・・・僕たちの最後の冒険は、東京タワーの電波ジャックだった。TVの電波はアナログ電波を使用している。その電波を妨害出来れば関東一円のTVは映らなくなる。大事件になるだろう。そしてもし、その電波に僕たちの声を乗せる事が出来れば僕たちは・・・」第三章 僕達の決断

中学生の小夜吉&慎太郎、出てくる。

慎太郎 「何やってんだよ！」

愛彦 「えっ？」

小夜吉 「早く行かないと！」

愛彦 「行く？行くなってどこに？」

慎太郎 「バカ！」

小夜吉 「決まってるでしょ！」

二人 「東京タワーよ！（だよ！）」

愛彦、状況を思い出し、3人走り去る。
猿飛出てくる。

猿飛 「港区全域に緊急配備！逃亡中の中学生3人を発見した。通常の無線はこれより使用を禁止する。目標の3人は電波を傍受するぞ。

猿飛去り、マカロニ出てくる。

マカロニ 「都内に潜伏中の中学生3人が動き出した！盗聴班は全ての周波数を拾え。3人は必ずサンプルと交信する。サンプルの名は、マカベシンジだ！

マカロニ退場。

小夜吉、慎太郎、アンテナで盗聴しながら登場。

愛彦はノートパソコンを持って登場。

小夜吉 「東からは警官隊！

慎太郎 「西からはヤツラだ！

愛彦 「カチャカチャカチャ、出た。港区の路地裏ロードマップ！

慎太郎 「まさかあの隠れ家がバレるとはな。

小夜吉 「コンビニなんか行くからでしょ！カメラついてんのよ！

愛彦 「どうせいつかはバレてた。やっぱりやるしかないんだ。

慎太郎 「東京タワーを電波ジャックか。

小夜吉 「助かるにはそれしかないわ。それに・・・

愛彦 「このまじやマカベシンジが世の中をメチャメチャにしてしまう。僕のせいで。だけど・・・

愛彦手を出す。

愛彦 「ぼぼぼ、僕は、世の中がムチャクチャになればいいなんて思ってた。前は思ってた事もあったけど・・・これからもそんな風に思う事もあると思うけど、でも今は・・・僕たち三人が助かって普通の生活に戻れる事を一番に願ってる。

慎太郎 「ああ。

愛彦 「これで最後にしよう。これでもうマカベシンジは現れないんだ。

小夜吉 「わかったわ。

三人、手を繋ぐ。
音響照明何か効果。

愛彦 「よし、ここからは別行動だ。

小夜吉 「そうね、三人一緒より。

慎太郎 「二人でもたどりつければ。

小夜吉 「今の時間は午後6時すぎよ。

慎太郎 「着く頃にはちようどゴールデンタイムだ。

愛彦 「それじゃあ、東京タワーで。

二人 「東京タワーで。

三人 「・・・。

3人走り去る。慎太郎は前に走る。

慎太郎 「俺の作戦は、”人混みに紛れる”だ。とにかく地上に出るぜ。カンカンカ
ンカン（梯子を登ってる）。パカッ（マンホールを開けた）

人々の喧噪。（マカロニ&愛彦&小夜吉以外で）

人々 「いやだーもう。

人々 「そういえばさあ。

人々 「あははは。（etc）

慎太郎 「慶応義塾？・・・大学か。よし。

人々 「あははは。（etc）

慎太郎、紛れようとした時、喧噪の中にマカロニがいる。
ふいに喧噪が止む。通行人はゆっくりと動き続ける。

マカロニ 「探したよ。

慎太郎 「！お前は・・・

マカロニ 「こちらマカロニ。ガキを一匹見つけた。

慎太郎 「く・・・

マカロニ 「お前を殺すつもりはない。サンプルと連絡を取ってるな。

慎太郎 「サンプル？

マカロニ 「知ってるだろ、マカベシンジだ。

慎太郎 「マカベシンジがサンプル？どういう事だ

マカロニ 「とにかく一緒に来てもらおう。

慎太郎 「くそう・・・

マカロニ 「ただのガキにしちや良くやったよ。

迫るマカロニ。

慎太郎 「た、た、・助けてー！
通行人達 「ん？」

慎太郎 「このおじさん、ヘンなんです！
通行人達 「えっ！

慎太郎 「バカめ、俺がまだあどけなさの残る中学生だという事を忘れていたようだな。
マカロニ 「しまった！

マカロニ 「しまった！

慎太郎、去る。

通行人 「ヘンなおじさんだ。ヘンなおじさんだ。
マカロニ 。

マカロニ、無言で2、3発撃つ。

通行人1 「あつ（撃たれた）

通行人2 「おふっ（撃たれた）

通行人 「わー！

通行人去る。

マカロニ 「スパイ失格の行為だが、プライドには代えられん。殺す。

マカロニ、去る。と同時に小夜吉出て来て走るマイム。

小夜吉 「私の作戦は”地下から東京タワーに出来るだけ近づく”よ！ここまで来れば。カンカンカンカン。（梯子を登る）バカッ！（マンホール開いた）ん？
ここは？

SP二人、登場。

SP1 「陛下！どこにいらっしやいますか、陛下ー！

SP2 「美智子様、お孫様のマコ様がひきつけをー！

SP二人、去る。

小夜吉 「しまったー！あのやんごとなきご家族のご自宅に！？パタン。（マンホール閉めた）思いつき行きすぎてしまったわ！

猿飛、地下道にすつと現れる。

小夜吉 「はっ。

猿飛 「小娘、とうとう見つけたぞ。

小夜吉 「あなたは!？」

猿飛 「内閣安全保障室直属、猿飛ななみ。山ではあやうく溺れ死ぬかと思ったわ。

小夜吉 「内閣?安全?」

猿飛 「既に警官隊が包囲している、もう逃げられんぞ。

小夜吉 「フッ! (吹き矢)

猿飛 「ヒラリ! (よける) フフン、少し話を聞かせてもらうだけだ。マカベシンジという少年のな。

小夜吉 「マカベシンジは、

猿飛 「少し血抜きをしてやろう。

猿飛、切りかかり小夜吉よける。

小夜吉 「マカベシンジは・・・二度と現れないのよっ! えい、ボワーン!

小夜吉去る。

猿飛 「しまった、お主も忍術使いか!? 待て!

猿飛、去る。同時に愛彦出て来て走る。

愛彦 「僕の作戦は”修学旅行生のフリをする”だ! カンカンカンカン (梯子登ってる) バカッ (開けた) どこだここ。メルパルクホール? やった、近いぞ。(見上げる) あれが東京タワー。パシャ (写真取る) いやー、東京はスゴカ所やね。ハアー。スゴカあ。パシャつと。ピロピロピロ (電話) ……ん?

慎太郎出て来て走る (電話)

慎太郎 「愛彦!

愛彦 「大豪田君!？」

慎太郎 「スパイに見つかっちゃった。たぶん東京タワーじゃ会えない。

愛彦 「そんな。

慎太郎 「俺は出来るだけハデに動いてオトリになる。頼んだぞ、お前が頼りだ。

愛彦 「大豪田君!

慎太郎、去る。

愛彦 「ピロピロピロ（電話）、はい！」

小夜吉、出てきて走る。

小夜吉 「野火君、私、もうダメだわ。

愛彦 「小夜吉！」

小夜吉 「あの忍者に追われているの。追いつかれるのは時間の問題よ。

愛彦 「どこだ！？助けに行くよ！」

小夜吉 「ダメよ、あなたただけでも東京タワーに行つて。

愛彦 「小夜吉！」

小夜吉 「じゃあね、ピ。

小夜吉、去る。

愛彦 「……………」

愛彦をいたぶるかのような目でテキーラ&ポンチョ現る、

テキーラ 「見つけましたね。

ポンチョ 「そうね。

愛彦 「……………そつ！」

愛彦、走る。テキーラ&ポンチョ追つて。そのまま去る。

小夜吉、入れ替わるように逃げてくる。足がもつれ倒れた。

小夜吉 「く……」

猿飛出てくる。

猿飛 「こんなビルの谷間に逃げるとは、バカなヤツよ。

小夜吉 「フッ

猿飛 「ヒラリ。無駄だ、小娘。

猿飛切りかかり、よける小夜吉。

猿飛、予想していたように小夜吉の背後をとって首を絞める。

小夜吉 「ぐわ！」

猿飛 「息が出来まい。私は意外に執念深いのだ。

小夜吉 「ぐ……ぐう……」

小夜吉、意識を失う寸前。

猿飛 「ふっはっはっは、ん？フラフラ、バタリ。

猿飛倒れる。同時に小夜吉も。

小夜吉 「はあはあ、どうして・・・？

明智、口にハンカチを当てて出てくる。

明智 「大丈夫か、大和屋。

小夜吉 「先生。

明智 「ちよっと通りがかったもんでな。まだ立ち上がるな、ちよっとこの辺ガスが漏れたみたいだから。

小夜吉 「・・・。

明智 「どうだ、野火と大豪田は元気か。

小夜吉 「はい。

明智 「お前達、友達になったか。

小夜吉 「はい。

明智 「・・・そうか。

小夜吉 「私、もう行きます。

明智 「ああ、気をつけてな。

小夜吉 「はい。

小夜吉、行こうとするが

明智 「先生お前達が何してるのか知らないけど、全部終わったら、ちゃんと学校

来いよ。先生、待ってるから。

小夜吉 「はい。・・・だけど、あたしが先生と会ったのはそれが最後だった。

小夜吉、走り去る。同時に明智去る。倒れている猿飛も。

場面変わって、慎太郎、逃げて来て盗聴する。

慎太郎 「・・・。

マカロニ出てくる。

マカロニ 「A班B班、ガキの一人が小学校に逃げ込んだ。取り囲め。

マカロニ去る。

慎太郎 「くそ、もうダメか。ピ。」

愛彦、別場面でどこかに隠れようと走っている様子。息が荒い

愛彦 「ハアハア、ピロロロ。大豪田君！今どこ？

慎太郎 「どっかの小学校だ。東京タワーが見える。もう着いたか？

愛彦 「ダメだ、僕も追われている。小夜吉も。」

慎太郎 「そうか。俺はもうダメだ。スパイに取り囲まれている。

愛彦 「えっ

慎太郎 「短いときあいだったけど、楽しかったぜ。ピ。」

大豪田、警戒しながら去る。

愛彦 「大豪田君！

小夜吉、別場面。出てくる。

小夜吉 「ピ。」

愛彦 「ピロロロ。小夜吉、無事か？

小夜吉 「私は大丈夫、東京タワーに向かっているわ。

愛彦 「大豪田君が・・

小夜吉 「わかってる。落ちついて聴いて。

愛彦 「え？

小夜吉 「天空に言葉は溢れてる。どんな言葉でも、それを聞いている人は必ずいるわ。」

愛彦 「ラジオドッグか。」

小夜吉 「盗聴電波の周波数を使って助けを呼ぶの。人が集まれば、スパイは動けないわ。」

愛彦 「・・わかった、やろう。」

二人 「ピ。」

二人、アンテナを出す。

小夜吉 「398MHzから400MHz。」

愛彦 「139、97MHzから140MHz。」

小夜吉 「聴こえますか。」

愛彦 「聴いている人いますか。」

二人が語りかける二つの別空間。

さらにもう一つの別空間（屋上）に、慎太郎が出て来る。

小夜吉 「私達はスパイ組織に追われている中学生です。

愛彦 「お願いです。僕たちの声が聞こえたら・・・

マカロニ、慎太郎の目の前に現れる。

慎太郎 「！！！」

マカロニ 「バカと煙は高い所が好きとはよく言ったもんだ。

小夜吉 「これは悪戯ではありません。

マカロニ 「わざわざ逃げ場のない屋上に逃げるとは。

愛彦 「僕の友達が殺されそうなんです。

マカロニ 「探す手間がはぶけた。礼を言うよ。

慎太郎 「わー！」

慎太郎、殴りかかるが返り討ちにされる。ポッコボコ。

小夜吉 「お願い。私の友達がスパイに殺される。

愛彦 「場所は東京タワーの見える小学校。

小夜吉 「何もしなくていいんです。

愛彦 「ただ集まって下さい。お願いします。

小夜吉 「お願いだから。

愛彦 「お願いします。

慎太郎、ぐったりと倒れている。マカロニ銃を出す。

マカロニ 「誰が変なおじさんだ、え！？

二人 「全てのラジオドッグに告ぐ。空に溢れる言葉の中で、この言葉は本当に大切な言葉です。心からの言葉です。

愛彦 「お願いです。

小夜吉 「お願いですから。

二人 「全てのラジオドッグに告ぐ。場所は、東京タワーの見える小学校。

マカロニ 「死ぬ。・・・ピロロロ、ん？はい、こちらマカロニ。

二人 「お願いします。

マカロニ 「ラジオドッグ発見？ほっとけそんなもん。・・・なんだと！？

マカロニ、屋上から身を乗り出すように地上を見渡す。

二人 「全てのラジオドッグに告ぐ。空に溢れる言葉の中で、この言葉は本当に大切な言葉です。心からの言葉です。場所は、東京タワーの見える小学校。

マカロニ「100人？200？なんでそんな数がここに集まるんだ。包囲網を解け！
姿を見られるな！」

慎太郎、フラフラと立ち上がっている。

マカロニ「ん？お前・・・」

慎太郎「うりゃー！」

マカロニを持ち上げるように、屋上から突き落とす。

マカロニ「わー！こんな最後かー！？」

マカロニ、墜落死。

小夜吉、愛彦、去る。

慎太郎「ピロロロ。ピ。愛彦か？」

謎の声「君達の行動は全て聞いていた。」

慎太郎「誰だ、お前。」

謎の声「東京タワーに向かいたまえ。君の友達が君を救ったんだ。」

慎太郎「スパイの仲間か。」

謎の声「その逆だ。君達と同じ、ラジオドッグだ。」

ノイズ！慎太郎走り去る。

愛彦逃げてくると、テキーラ&ポンチョが彼を挟むように現れる。

ポンチョ「見つけたわ。」

テキーラ「そうですね。」

愛彦「くっ・・・」

愛彦、走る。

テキーラ「捕まっちゃまいな。」

ポンチョ「そうよ、捕まりなさい。」

愛彦「いやだ！絶対に捕まらない！」

ポンチョ「逃げ切れると思ってるの。」

テキーラ「世間をなめてもらっちゃ困りますよ。」

ポンチョ「学校にも行かないくせに。」

テキーラ「友達もいないくせに。」

愛彦「ぼ、ぼ、ぼ、僕は！」

テキーラ&ポンチョ、冒頭の中学生役に早変わり。

愛彦 「ハア、ハア・・・！」（走って逃げている）

テキーラ 「待てよ、のび太！」

ポンチョ 「学校来なさいよ、のび太！」

愛彦 「ほ、僕はのび太じゃない！野火愛彦だ！」

ポンチョ 「僕はのび太じゃない。」

二人 「わははははは。」

テキーラ 「捕まえたらどうする？」

愛彦 「僕は

ポンチョ 「パンツ脱がせてやる。」

愛彦 「僕は、

二人 「わははははは。」

愛彦 「僕は、僕は、僕は！僕はのび太じゃない！！！」

愛彦、スピードを上げる。

ぶっちぎられるテキーラ&ポンチョ。

二人 「わー。」

と、二人、消えていく。退場。

死ぬ気で走った愛彦、倒れていると小夜吉&慎太郎出てくる。

慎太郎 「愛彦！」

愛彦 「えっ

小夜吉 「着いたわ、東京タワー！」

愛彦 「ほ、ほんとだ。」

慎太郎 「いくぞ。」

と、東京タワーに入っていく、エレベーターに乗って上階へ

3人 「ブーン・・・（エレベーター）チーン。」

小夜吉 「やるわよ。」

3人、バッグの中からアンテナなどを出す。

慎太郎 「妨害電波発生！ぼちっとな。」

小夜吉 「ぼちっとな。」

愛彦 「ぼちっとな。」

ノイズ。毒気がぬかれたような3人。

慎太郎 「これでTVは映らなくなった。

小夜吉 「出力が弱いから、関東一円ってわけにはいかないけど。

愛彦 「今頃苦情が殺到してるはずだ。10円ある？」

小夜吉 「はい。

小夜吉、二人に十円を渡す。

公衆電話をかける。

愛彦 「もしもし？東京タワーですか？今TVが映らなくなってると思うんですけど、

ど、

慎太郎 「もしもし、警察ですか？僕たち今、東京タワーにいるんですけど

小夜吉 「もしもし、朝日新聞ですか？私達、都内に住む中学生なんですけど

3人 「僕たち、東京タワーを電波ジャックしました。

アンテナを出す。みんな微笑みながら

小夜吉 「TVを見ている人聴いて下さい。

慎太郎 「僕たちは行方不明の中学生3人です。

愛彦 「今、東京タワーを電波ジャックしました。

小夜吉 「最近話題のマカベシンジという少年ですが。

慎太郎 「彼はもういません。

愛彦 「この電波ジャックはマカベシンジが考えたものです。

小夜吉 「私達は彼に威されて仕方なくやりました。助けて下さい。

慎太郎 「さっきマカベシンジは僕たちを置いて逃げました。

愛彦 「マカベシンジの特徴は・・

小夜吉 「14才で。

慎太郎 「背は150センチとちょっと小柄だけれど

愛彦 「その頭脳は大人をも凌駕する。

小夜吉 「トレードマークはサイズの合わない大きなベレー帽。

慎太郎 「好物はペロチュー。

愛彦 「いつも口にくわえてて。

小夜吉 「そのペロチューに粉をつけて舐めた時、彼の頭脳はフル回転！

3人 「どんな難事件もたちまち解決！

3人、微笑み合う。

愛彦 「・・・と、いうような少年です。

小夜吉 「早く助けに来て下さい。
慎太郎 「以上。」

八丁堀、別空間に出てきて。

八丁堀 「目標の中学生は東京タワーにいる。直ちに拘束。マカベシンジという少年は、彼らを置いて逃走した模様。まだ近くにいるはずですが、特徴は今TVの音声で伝えた通り。急げ！」

八丁堀消える。

愛彦 「マカベシンジは二度と現れない。」

小夜吉 「……。」

愛彦 「考えたんだけど、僕たちは別々になろう。」

慎太郎 「……そう言うと思ってたぜ。」

愛彦 「ぼぼぼ、僕もつらいけど、でも僕らが一緒にいると」

小夜吉 「……いや。」

愛彦 「小夜吉、聴いてよ。僕だっけと3人一緒にいたいと思う。だけど、またマカベシンジが現れた時、僕は自分が何を願うのか自信がないんだ。また世の中をムチャクチャにしようとするかも知れない。そんなのはいやなんだ。」

小夜吉 「いいじゃない。世の中がメチャクチャになったって。私達、友達なんですよ。ずっと一緒にいるから、友達なんですよ。」

慎太郎 「我俣言うんじゃねえよ。」

小夜吉 「大豪田君は、いやじゃないの!? 3人別々になっても平気なの？」

慎太郎 「そんなわけねえだろうが! …俺も3人で小説の話考えたりとか、ずっとこんな感じでいけたらいいなと思ってた。俺は、お前らが好きだ。だけど。」

小夜吉 「私はいやよ! 私には二人とも生まれて初めての友達なんだから。いいですよ、世の中なんて。ううん、本当は二人ともそんな事思っていないのよ。私がいやなのよ! 私がイヤなんですよ!」

愛彦 「そんな事ないよ!」

小夜吉 「絶対そうよ。触らないで! うー……。 (哀しみに耐えるあまり唸ってる)」

愛彦 「小夜吉。違うんだよ!」

小夜吉 「うー。うー。」

愛彦 「そんな風にならないですよ。小夜吉は女の子だから守ってあげなきゃって思ってたけど、やっぱり僕は全然ダメなんだ。小夜吉は僕なんかより強いじゃないか。お願いだから、そんな風にならないですよ。」

小夜吉 「かわいいて言ってくれた野火君が好きだ。私、ヘンテコなのに普通に扱ってくれた大豪田君が好きだ。二人とも大好きなのに……。」

慎太郎 「……俺の目は、生まれつき色が見えない。」

小夜吉 「……………」

慎太郎 「俺の目は犬の目だ。俺に見える世界はみんな白黒だ。昔は少しは見えたけど、最近急に見えなくなった。」

小夜吉 「……………」

慎太郎 「知らなかっただろ、小夜吉。俺もヘンテコだ。気づかれないようにバカやっていたんだ。」

小夜吉 「……ホントなの？」

慎太郎 「ああ。それで愛彦。俺の景色から本当に色がなくなった日、俺はお前ん家に行ったんだ。」

愛彦 「えっ。」

慎太郎 「だから、一緒に小説書こうって言ったんだ。小説なら色が見えなくても、なんとかなるかも知れないと思った。俺の目の事もお前ならバレたっていいと思った。お前は学校にも来ない友達もないのび太だからな。」

愛彦 「……………」

慎太郎 「なんとか言えよ、のび太。」

愛彦 「……………」

慎太郎 「なんとか言え、のび太！」

愛彦 「……知ってたよ。」

慎太郎 「え？」

愛彦 「知ってたよ、君に色が見えない事も。なんで僕を選んだのかも。マカベシンジが僕にだけ教えてくれたんだ。」

慎太郎 「なんだと。」

愛彦 「お前の目は犬の目だ！黙れよ、色も見えないくせに！」

慎太郎 「言うじゃねえか、のび太のくせに。」

愛彦 「バカにしやがって、色も見えないくせにエラそうにしやがって！」

慎太郎 「ナマイキなんだよ、のび太のくせに！」

愛彦 「僕はのび太じゃない！」

慎太郎 「のび太だ！のび太のび太のび太のび太！」

愛彦 「黙れ、こ、こ、こ、この犬野郎！」

二人、耐える。

小夜吉 「野火君はのび太じゃないよ。野火君は優しいし、私が二人と友達になれたのは野火君のお陰よ。大豪田君も犬の目だつて別にいいじゃない。私がその目になってあげる。だから、3人一緒にいませよ。」

愛彦 「小夜吉、ごめん。でも、ダメなんだよ。」

小夜吉 「これからずっと生きてたって、友達なんて出来ないかも知れない。幾ら待っても友達なんて呼べる人が現れないかも知れない。ずっと一人ぼっちかも知れない。」

愛彦 「……………」

慎太郎 「そんな事ねえよ。お前、女にしちやいいヤツだから。きつといっぱい友達出来るよ。」

小夜吉 「私は、私は他に友達なんていらんないの！二人と一緒にいたいなの！ずっと3人一緒にいたいなの！他の人間なんて、全員死ねばいいのよ！」

小夜吉、狂ったようにツメを噛む。

愛彦 「やめろ！血が出てるじゃないか！」

小夜吉 「ううー！」

愛彦 「やめるんだ！」

愛彦、小夜吉の手を捕まえる。

小夜吉 「……」

愛彦 「またいつか会おう。僕が世の中をムチャクチャにしたいなんて、全然思わない明るいヤツになれたら、その時また3人一緒に会おう。」

小夜吉 「……」

愛彦 「また会いたいんだ。小夜吉は、か、か、かわいいから。」

小夜吉 「……ほんと？」

愛彦 「うん。」

慎太郎 「小夜吉。俺、色が見えないけど、その分耳はいいんだ。犬の目の俺はラジオドッグになって、いろんな秘密を暴くそんなヤツになる。だからお前はさ

小夜吉 「じゃ……じゃあ私は警官になってあんたを捕まえてやる。絶対、捕まえてやるから。」

慎太郎 「おう。」

愛彦 「僕は小説家になる。小説家になって僕たち3人の事を書くよ。どうして僕らが友達になったのか、どうして僕らがバラバラにならなきゃいけないかったのか、いつか必ずそれを書くから。それが合図だ。僕がその本を書いたら、また3人一緒に会おう。」

慎太郎 「わかった。またな。」

小夜吉 「またね。」

愛彦 「……また。」

声のみ 「いたぞ！」

声のみ 「あの3人だ！」

3人 「……！」

別れの時だ。

3人 「う、うう・・・」

四方から警官達が迫る（出てきません）。

3人 「ウー、ワンワンワンワンワンワン！ワンワンワンワンワンワン！

悲しく吠える、三匹の犬。

音響大きくなり、暗転。

壁に文字。

ソラニアフレル
キエテクコトバ
イミダケノコシテ
キエテクコトバ
意味だけ残して
消えてく言葉
ソシテ、
そして、
ボクハ・・・
僕は・・・

照明ついて、現代。
現代の中学生3人、パソコン前でマカベ状態。
パソコンを叩いている1。
キーン。

3人 「はっ

1 「何時間経ったの？

3 「1時間も経ってる。

1 「追手は？

3 「さあ。

2 「（パソコン画面を見て）これ・・・

2人 「えっ

慎太郎 出てくる。

慎太郎 「（携帯みたいので）見つけた。

3人 「わっ

小夜吉愛彦出てくる。

1 「あなた達は

小夜吉 「今読んでた小説の3人よ。あなた達のマカベシンジのせいで世の中がムチャクチャになってるわ。どういうつもりなの？」

1 「み、みんなが幸せになれる方法を考えてもらったの。マカベシンジに。

小夜吉 「え？」

1 「ほんとは私達3人が幸せになれる方法のつもりだったんだけど、人間みんなを幸せにする方法になっちゃったの。」

3 「そうなんだ。」

小夜吉 「何言ってるの？このウス汚れたアジアの子供達は。ね？分かる？野火君。」

2 「自分だってアジア人のくせに。」

小夜吉 「お黙りっ。」

愛彦 「つまり経済を破綻させたのは、みんなの幸せの為だったわけか。」

小夜吉 「余計なお世話よ、クソガキ共！」

3人 「怖いお姉さんだ。」

愛彦 「とにかくこれで

慎太郎 「（なんか盗聴してた）一件落着いてわけにもいかねえようだ。八丁堀が追って来てる。」

小夜吉 「えっ

慎太郎 「この地下道を取り囲んでやがる。」

小夜吉 「しまった。つけられてたのね。」

1 「どうしよう学校に連れ戻されちゃう。」

3 「怖いよ。」

愛彦 「僕らも無事に済むとは思えない。なんとか逃げよう。この子達を連れて。」

慎太郎 「それがハンパじゃねえ数だ。6人全員が逃げきれれるとは思えねえ。」

小夜吉 「じゃあどうするの？この子達が捕まったらまた研究だとかで同じ事が起こるわ。」

慎太郎 「覚えてるか愛彦。」

愛彦 「え？」

慎太郎 「一番最初に考えた小説だ。」

愛彦&慎太郎 「人間が通れない所でもバラバラなら通れる。」

小夜吉 「血塗られた惨劇ね。」

1 「何の話？」

愛彦 「マカベシンジをバラバラにするんだ。」

中3人 「えっ？」

慎太郎 「そう。バラバラに逃げる。俺とお前（2）。小夜吉と女の子。愛彦はそのウスラでかいの頼む。」

小夜吉 「(3をチラリと見て) なんだか安心したわ。
慎太郎 「一組でも逃げ切れりやマカベシンジは二度と現れない。研究つてのも続か
ねえはずだ。いいか？」
小夜吉 「ええ。
愛彦 「わかった。
1 「それで助かるなら。
3 「ばいばい。
2 「じゃあ。
慎太郎 「行くぞ！」
慎太郎&2のみ残して去る。
慎太郎&2走って、ちよつと止まる。
2 「あの、あの。おじさん。
慎太郎 「おじさんじゃねえ。
2 「マカベシンジが、いやあの、僕らのマカベシンジが野火さんの小説を読んだ
後に文章を残してたんだけど。
慎太郎 「どんな？
2 「世の中をムチャクチャにしたいって愛彦が望んだからってあれ、ウソだった
んじゃないかって。
慎太郎 「あん？
2 「小説の感じではあの時の愛彦の一番の願いは”強くなりたい”だったんだ。
だからそれを叶える為に、マカベシンジはウソをついたんじゃないかって。
慎太郎 「ウソ？
2 「僕にはまだ良く分からないけど、人間が強くなるにはワカレとかカナシミと
かコウカイとかが必要なんだって。マカベシンジも良く分からないらしい
けど、それを愛彦に経験させる為にウソをついたんだって。
慎太郎 「ちよつと待て。そのせいで俺達のマカベは二度と現れなくなったんだぞ。
そりや自殺と同じだ。
2 「声みたいに電波みたいに、マカベシンジには意味しかないんだよ。意味が残
せればえつとなんだつけそんざいいぎが残せるから、だから
慎太郎 「お前、気に入ったぜ。
2 「え？
慎太郎 「俺達もそうするぞ。
2 「何のこと？
慎太郎 「俺達もいなくなるんだよ。
2 「は？
慎太郎 「そうすりゃあいつらは助かる。3人揃わなけりや意味ねえからな。
2 「や、やだよ、そんな。
慎太郎 「お前、少年ジャンプ好きか？

2 「う、うん。

慎太郎 「なら分かるだろ？ こういう時、ワリ食うのがヒーローのつとめだ。

2 「ヒ、ヒーロー？

慎太郎 「俺の計算が正しけりや死にやしねえ。が、もうあいつらには会えねえ。一生な。だけどそれであいつらは助かる。覚悟はいいな？

2 「わ、わ、わ、わかった。

慎太郎 「俺がみこんただけはある。行くぜ、ぼちつとな！

爆音！ 地下道の崩れ落ちる音。暗転。

小夜吉&愛彦。 何日か後。 小夜吉ケガしてる。

小夜吉 「あのバカ、ハデに地下道ぶっこわしてくれたお陰で散々だわ。

愛彦 「彼の行方は？

小夜吉 「自衛隊と機動隊もかなり巻き込んだから、死体の特定は不可能。生きてるなら、ラジオドッグやってんでしようけどあいつを発見するのは私じゃなきや無理よ。

愛彦 「・・・あの中学生3人が通ってた学校が放火にあって全焼したよ。たぶん研究も終わりだ。

小夜吉 「そう。はい、これ。

愛彦 「なに、これ？

小夜吉 「いつかの手紙の返事よ。

愛彦 「え？

小夜吉 「入院してて暇だから書いたの。別に読まなくていいけど。

小夜吉の携帯が鳴る。

小夜吉 「悪いけど、仕事だわ。

愛彦 「僕もだ。今からラストシーンを書かなきゃいけない。

小夜吉 「え？

落田と二宮出てきて敬礼（負傷者には礼を尽くすのだ）

小夜吉、敬礼を返す。

愛彦 「僕たちの小説のね。

小夜吉 「そう。頑張ってる。

愛彦 「そっちこそ。

小夜吉、去る。

ゆっくりとパソコンに向かい・・・

愛彦

「そうして僕たちは別々になり、僕たちの長い長い夏休みは終わった。2学期が始まると小夜吉はまた転校していて、大豪田君は行方知れずになっていた。そして僕は・・・僕はあいかわらず、クラスの誰とも話さない、1日が少しでも早く過ぎる事だけを願うそんな毎日を送っていた。そんな日々の中、僕は小夜吉に短い手紙を書いた。メールじゃなく手紙を。もう二度と会えないかも知れない、一番好きな女の子に。」

中学時代の小夜吉、出てくる。

小夜吉

「(手紙を封筒から出す)・・・、大和屋さんへ。元気ですか？僕は元気です。大豪田君もいなくなって、明智先生もいなくて、八丁堀先生もいなくなっていて、なんだかあの大変だった日々が夢だったような気がしていません。」

ふと、それを中学生の慎太郎がせつない顔で盗聴している。

小夜吉

「二週間も家を留守にしたので、親からはすごく怒られたけど。とにかく僕は元気です。大和屋さんはどうですか。」

小夜吉

「将棋部は、僕一人だけになってしまったので活動はしていません。例えば、一度も2人とは将棋をしたことがありませんでしたが、将棋のルールは知っていますか。・・・実は僕はあまり知らないです。とにかく僕は元気です。」

毎日学校に行っています。

この手紙の返事は書かないでもいいです。本当に書かないでもいいです。もし書いてくれるとしたら、それはもともとは僕らが大人になった頃に。・・・。

それでは。元気で。さようなら。

小夜吉

「・・・聴いてる？ねえ。・・・。」

慎太郎「・・・。」

愛彦去る。小夜吉、ちよつと間をおいて去る。

慎太郎、佇んでいる。

ノイズ！ 通行人出てくる。

通行人

「ちよつと聞いてくれる？ケロリンがさあ

通行人

「はい、カナリア洋品店です。」

通行人 「私達つてもう終わりなのかな。
通行人 「そうだ、ムラカミさん覚えてる？
通行人 「わっはっはっは、お前それは。
通行人 「ダメだよ。そっち谷だから。」

慎太郎、思いを断ち切るかのように雑踏の中に走り去る。

通行人 「インドで彼女がいなくなったんです。
通行人 「海の見える家に住みたいんだ。
通行人 「それでね、私言っちゃったのよ。
通行人 「その頃、浄水器売っちゃってね
通行人 「家の窓からは緑の松林が見えてき。
通行人 「男の子ならいいのにね。
通行人 「母さん、八宝菜ってどうやって・・
通行人 「まっさかあ。ないない、それは。
通行人 「白いカーテンが海からの風で揺れて。
通行人 「こんな世界は間違ってると思うんです。ですから一緒に弥勒様の
通行人 「こちら1階となっております。
通行人 「ちがうちがう、パロスペンシャルってのはこうやってこう！
通行人 「ぎゃー。
通行人 「そうだ、犬を飼おう。白い犬がいい。」

ノイズ大きく。

暗転。

おわり。